

---

# ゲーマーズ 二人の勇者

うひょ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゲームーズ 二人の勇者

### 【NZコード】

N7348E

### 【作者名】

うひょ

### 【あらすじ】

涉は中学一年生。ゲームの世界では、だれにも負けない勇者だけど、現実世界では、いじめっ子にヘラヘラと笑うしかない意気地なし。そんな涉が、ゲームのキャラクターと勘違いされて戦乱の異世界へと呼び出されてしまつ。「この世界を救うなんて絶対に無理。おれは勇者なんかじゃないんです。ただの中学生なんですよ!」涉は本物の勇者になれるのか。世界の命運がその手に託された。異世界召喚ファンタジー。

## 第一話 リアルな世界

邪悪なものが目を覚まさうとしていた。その気配に、あらゆるもののが静止し、声を失つた。風も止んでいた。並ぶ大樹の枝ひとつきします、木の葉一枚そよがない。太陽ばかりがギラギラと輝いて、影が不自然なほどに濃く、大地へと押しつけられていた。

巨大な城塞都市《リン・ベルミカ》の大門の前には、見慣れぬ人ばかりができていた。その一人一人が、世界でも名だたる戦士であり、魔術師であり、僧侶であつた。あまねく世界を旅し、幾多の魔物を討ち滅ぼし、奇蹟と神祕を欲しいがままににしてきた歴戦の勇者たちである。だが、これから起きようとしていることは、彼ら勇者たちをしてさえ、ただの傍観者でしかいられぬものであった。申し合わせたように、ある一点を中心として、ぐるりと巨大な円を描く勇者たち。その視線の集まる先にあるのは、虚空中に浮かぶ、この世のものならぬ穴である。厚みはなく重さもなく、それでいて、どの角度から見ても“空間を蝕む闇”として確かにそこに存在しているのであった。

その穴の前には、一人の戦士が颯爽<sup>さつやう</sup>と立ちはだかっていた。戦士の名はアストレイ。人の限界を超えて、世界を変える力すら手にした男。あまたの勇者がしのぎを削るなかにあって、比類無き眞の勇者と呼ばれる、孤高の存在であった。

邪悪な臭気が穴の向こうから湧きってきた。それは実体を備えた闇の触手となつて、食虫植物のように獲物の気配を求めて蠢いた。遠くアストレイをとりまく勇者たちは、身にまとう鋼鉄を鳴らしながらジリジリと後退りした。危機に際する本能から、知らずと武器を構え、守りの魔法を準備する者もいる。アストレイは足下にじやれつく触手を蹴り飛ばしながら、周囲のざわめきを冷めた目で見ていた。それはまだ、始まりですらないのだ。

やがて遠い雷鳴のような轟<sup>じご</sup>きのあとで、大地が揺れた。異界へと

通じる穴　　『門』<sup>ゲート</sup>は、想像を超えた質量が通過しようとするその衝撃に悲鳴をあげていた。一陣の冷気が『門』<sup>ゲート</sup>から吹き出てきて、土ぼこりを舞いあげた。思いだしたかのように木々がざわめき、城壁を成す石がビリビリと震えた。

人の輪にざわめきの波紋が拡がり、押さえきれない恐怖の叫びが、そこかしこであがつた。同時に、『門』<sup>ゲート</sup>の向こうから甲高い吼え声が響いてきた。金属的な大音声だ。だれもがその異様な音に、つかの間恐怖すら忘れて痺れたようになっていた。勇者アストレイもまた、不敵な笑みを顔にはりつけてはいたが、手の平が染み出る汗でべとつくのを感じていた。

とてつもなく邪悪なものが、『門』<sup>ゲート</sup>の向こうから顯れようとしていた。勇者アストレイが、神々の助力を得て開いた『門』<sup>ゲート</sup>。それは、『最果ての迷宮』<sup>ラストラビリンクス</sup>の最奥へと繋がっていた。アストレイは呼び出そうとしていたのだ。あらゆる世界で最も邪悪にして最も強力な存在を。まだれも見たことのない、危険なにかを。それはただ、自分が何者よりも強いことを、神々に証明するためだけに。

甲高い咆吼<sup>ぼうこう</sup>は、ヘビのようになれる地面の脈動と高らかに響きあつた。人の輪のあちこちでほころびが生まれ、この決戦を見届けようとする決意が、わずかにも鈍った者たちは、互いに手を取り合つて城壁の向こうへと避難した。だが多くの勇者たちは、油断なく身構えながらも、そこに踏みどどまるを選択した。そしてついに、そうしたすべてをあざ笑うかの『とき戦慄の影』<sup>ダークエンシントムラゴン</sup>が、『門』<sup>ゲート</sup>を飛びだしてきた。『闇の古代竜』である。

ドラゴンは、その圧倒的な質量で『門』<sup>ゲート</sup>を破壊した。そして空中へと舞いあがり、暗黒に濡れる両翼を大きく広げた。厚い皮の翼に太陽が隠されて、地上は一瞬にして暗がりに覆われた。黒い鱗が不気味に煌めき、目は赤黒く燃えていた。うなるように開いた口には、邪悪な歯がずらりと並び、不気味な光りを放っていた。その口の奥では、長く赤い舌が、呼吸にあわせて渦を巻いている。

だれもがつかの間、呆けたように闇のドラゴンを見つめた。それ

は巨大で、力強く、なによりも美しかった。あらゆる冒険を乗り越えてきた勇者アストレイにしても、驚嘆なしに、その怪物のかもし出す死を呼ぶ美しさを見つめることはできなかつた。だが同時に、泡立つ歡喜が勇者の鼓動を臨界まで速めた。この化け物を、己が足下にひれ伏させるのだ。

ドラゴンは力強く羽ばたきながら旋回し、グングンと上昇した。巨体に似合わぬ軽々とした飛翔であつた。このときになつて始めて、安全な距離をとつているとかをくくつていた見物の勇者たちも、死がだれの上にも平等に降り注ぎ得るものだと知つた。遙か上空から獲物を探すドラゴンの瞳が、勇者アストレイをただ一人の敵と認めるどんな保証もないことに気がついたのだ。

だが、勇者アストレイは弓と矢を手探りで取り出すと、空の闇にめがけて矢を放つた。魔力の込められたその矢じりは風を裂き、吸い込まれるようにドラゴンの胸元へと突き刺さる。苦痛の呻きが雷鳴のように大気を震わせ、雲を散らした。

「勇者アストレイがここにいるぞ！」

轟きよりも高らかにアストレイは叫んだ。

黒い猛禽もうきんは、白く輝く剣を構えた忌々しき敵の姿を捕らえた。その目が、怒りのために溶岩色へと染まる。《闇の古代竜》ダークエンシェント・ドラゴンは牙をむき、岩をも沸騰ふつとうさせる地獄の炎を吐きだしながら、勇者アストレイに向けて急降下をした。

「ウオオオオオオオッ！」

ドラゴンのものとも、アストレイのものとも分からぬ雄叫びが、空と大地に響きあつた。決戦の火ぶたが、ここにきられたのだ。

憂鬱ゆううつな朝が、今日もまたやつて來た。学生服に身を包んだ桜井涉

は、背負つた眠気に押し潰されそうになりながら、通い慣れた通学路をとぼとぼと歩いていた。ふと立ち止まり、交差点の反射鏡に映つた自分の顔を見て、その青白さに驚く。

「低血圧なんだよ……、基本的に」

渉は頬をなでた。おまけに昨日は夜更かしをした。田の下にくつ  
きりと浮き出た隈くまがその動かぬ証拠だ。

「パソコンのやりすぎかな。なんか目もシバシバするし、肩はこる  
し……」

バキバキと音をたてて肩を回した。頑固なコリをいくらかでもほ  
ぐそうとするのだが、長い時間をかけて積み重ねられた疲労は、そ  
う簡単にそれはしない。いつそ生活を根本的に改善し、早寝早起き  
を心がけ、適度な運動をし、パソコン机にしがみつく時間を減らし  
たりしたらいいのだろう。そんなことはわかっている。同時に、そ  
んな生活は無理なこともわかりきっているのだ。絵に描いた餅どこ  
ろか、絵に描いた満千全席。とうていあり得ぬことだつた。歪んだ  
ミラーに映つた自分の、そのいかにも頼りない「もやし」のような  
体が、動かぬ証拠である。

「ふわああ……」

渉は思いきり大きな欠伸あくびをひとつすると、氣怠げな歩みを再開し  
た。そんな渉のテンションを知つてか知らずか、突然その耳に、頭  
に響く甲高い声が割り込んできた。

「おっはよう！ 昨日はすごかつたな。本当に一人で倒しちゃうん  
だもんつ。見てて興奮したぜ！ オレ、渉のことマジで尊敬するよ」

声変わりの途中のかすれたソプラノの声で、小倉健児は口早にい  
つた。健児は酒屋の次男坊で、渉とは幼稚園からの知り合いである。

「ああ、おはよ」

渉は頭痛を逃そうと、眉間につまみながらいった。

「でも、結構ヤバかつたんじゃないか？ あいつの息にはさ、『炎フレス  
スト・フロム・ファイヤー』レジへの耐性》がほとんど効かなかつたみたいじやん。いきなり三桁の  
ダメージ喰らつてたから、もう絶対ダメだつて思つたもん」

健児は激しい身振りを交えながら、昨夜の渉の奮闘を再現した。  
興奮冷めやらずといった感じで、その声がやけに甲高い。渉は時折  
うなづきながらも、口を挟むタイミングをつかめず、黙々と歩いた。  
ようやく遮ることができたのは、健児の話が三度目のループに入つ

たところである。渉の寝ぼけ頭にも、どうにか血が回り始めた。

「はいはいはい、まあ、《竜殺し》を《賦与》したら、《星霜の剣》

』のコンボでけつこうダメージが回ったからね。あれで勝てるって

確信したよ」

「へー、なるほどねー。おれも、もう少し魔法覚えようかな。レベルの高い《賦与》とかは、ちょっと手を出しにくいんだけどさ、やっぱ、アストレイみたいに強くなりたいもんなあ」

そういうて健児は熱心な瞳で渉を見つめた。

二人は、オンラインゲーム、「ロストイマジン」のプレイヤーであつた。それは一年ほど前にサービスが開始されたネットワークゲームであり、いわゆるMMORPGのひとつである。世界各地にいる数千人のプレーヤーが同時に一つのサーバに接続し、サーバー内に構築された架空世界の住人に扮して、他のプレーヤーと協力、あるいは対立しながら、架空世界での生活や冒険を楽しむゲームだ。

渉も健児もロストイマジンの世界にそれぞれの分身を有していた。渉のそれがアストレイであり、健児のそれはヘラクスであった。昨夜、アストレイと闇のドラゴンとの決戦を、ヘラクスは遠く取り囲む人垣に混じつて見つめていた。ヘラクスも修練を積んだ戦士であつたから、並のモンスターを相手に後れを取ることはないし、普段はアストレイとともに、世界の最も危険な地域を闊歩<sup>かつぽ</sup>し、武勇を轟<sup>とどろ</sup>かせていた。だが、アストレイと比べてしまつては、ヘラクスはその足下にも及ばない。

「そういうや舟木さん、今度のアップデートで魔法を大幅に増やすつていいってたよ」

渉はいつた。舟木さんは、ロストイマジンの中心となる開発者の一人だ。サービス開始当初から、自身もロストイマジンのゲームに参加しているらしく、渉とはゲーム中で親しくなり、もう半年くらい前からメールでやりとりをしている仲であった。

「《闇の古代竜》<sup>ダーケンシヨントドラゴン</sup>も、正規版ではもう少し強くなるみたいないことについてたな。昨日みたいに一人で勝つのは無理になるかもね」

「そうなると、ヘラクスじや、ちょっと太刀打ちできないかもな。

そういうや、《世界のカケラ》の情報つて、なんか手に入れた？」

健児は、渉の鞄で揺れている小さなアクセサリーを見つめながらいつた。濁つた色の水晶のカケラが麻ひもに繋げられているそれは、ロストイマジンの世界に登場する、とある重要なアイテムを模倣したものであった。

『世界のカケラ』 それは、ロストイマジンの世界の各地に、十のカケラとして隠されているという強力な《聖極》<sup>アーティファクト</sup>であった。そのカケラの一つを所持するだけでも絶大な力が得られ、そのすべてを揃えたときには天地開闢<sup>かいびやく</sup>に等しい力が得られるといわれている。もつとも真偽のほどは定かではない。ロストイマジンのサービス開始以来二年がたつが、まだ、六つしかその存在は確認されていないのだ。にもかかわらず、勇者アストレイはそのうちの四つを所持してるのでから、やはり特別な存在だということができた。

「後のカケラつて、いつたいどこにあるんだろうね。八方手を尽くしてはいるんだけどさ、てんでだめ。情報もないよ。だいたい十個集めたらいいことがあるつて、ホントなのかな？ これに関しては、舟木さんも全然教えてくれないしさ」

「まだよつ！ 舟木さんに聞くのはズルイだろ」

健児が声を一層に甲高くしていった。ヘラクスもまた、カケラを求めて日夜世界を飛び回っている冒険者の一人なのだ。

「わかってるつて。カケラのありかなんて聞いてないから、怒らないでよ。まあ、聞いても教えてくれるわけないしね。健児も知つてるだろう？ 舟木さん、肝心なことになると、それはちゃんと遊んで楽しんでよつて感じで、すぐにはぐらかすんだ」

渉はいいながら鞄に提げた水晶のカケラを手の平ですくつた。指先にのるくらいの小さなそれは、黒くくすみがかつていて、特別きれいな石というわけでもなかつた。だがそれは他でもない。舟木さんが渉へとくれた、特別な贈り物だつた。

「いいよなあ、それ。本物みたいだもんなあ。アストレイがさ、四

つかケラを集めたからって、その御褒美にくれたんだりう？　おれも集めたらくれるかなあ？」

健児はヨダレを垂らしそうな顔で、渉の手の平で鈍く輝く《世界のカケラ》を見つめた。

「さあ、どうだらう。だいたい、まだ発見されてないカケラは、あと四つだけだろ？　どっちにしても、ぼやぼやしてると、だれかに先を越されるよ」

そういうながらも渉は、舟木さんは決して、他のだれにも《世界のカケラ》を贈ることはないだろうと思っていた。それは、自分とアストレイという、唯一無一の関係があつてこそものに違いないからだ。

「君とアストレイになら、これを託すことができると思つんだ。大事にしてよ」

舟木さんは、そんな手紙を添えて、《世界のカケラ》を送つてきた。

渉は《世界のカケラ》を見るたびに、アストレイを感じた。それは、自分とアストレイの絆がこの世に結実した、ひとつ奇跡のようだった。大事にしてよなんて、いわれるまでもない。

話しながら二人は、一軒の家の前にさしかかった。その瞬間まで、どうやってヘルクスが《世界のカケラ》を手に入れるのかなんてことを、力強く語っていた健児であつたが、閉ざされた門を目にした途端に、あわてて口を閉ざしてしまった。人が変わったように押し黙まり、口をへの字に結んでいる。渉にしても、あえてそこでロストイマジンの話題を口にしようとは思わない。

肉切り包丁バラバラ殺人。

二か月ほど前のことである。写真週刊誌にそんな煽りで特集された事件が、まさにその家で起きていた。小学校六年生の少年が、高一の兄と母を殺害し、大きな肉切り包丁でその頭部と四肢を切断したのだという。そんな事件が、自分たちのごく近所で起きたということでも驚きなのに、さらにいえば、その惨劇の引き金となつたの

が、兄弟間でのロストイメージをめぐるトラブルであつたところの  
だから、涉らにしてみれば一度びっくりである。

少年の写真は、事件後すぐに、インターネットで公開されていた。  
涉と健児は、並んでその写真を見ながら、時折、道ですれちがつた  
ことのある少年だと確認しあつた。例え自分に殺意が向けられるこ  
とがないにしても、殺人者と触れる距離にいたという事実は快  
いものではない。事件発覚と同時に少年は保護されていたから、も  
はやなんの心配もないのだが、それでもその家の前に立つと、なん  
とも空恐ろしい気持ちになつた。

涉は、通りすぎた白い家を、一瞬振り返つた。少年逮捕のエピソ  
ードというのがまた、事件のおぞましさに凄みを加えるものであつ  
た。なんでも、隣家からの通報で腐臭の満ちる屋内に警官が踏み込  
んだとき、少年は一人、返り血を浴びたままの姿でゲームをやつて  
いたというのだ。それがロストイメージであることを涉は確信して  
いた。

涉はわずかに足を速めた。健児も、あわてて涉に続く。そうして、  
二人は角を曲がり、その家が視界から完全に消えたところで、よう  
やく立ち止まり、息をついた。

「ヒーッ」

健児は、奇妙な声を漏らして、ぜいぜいと大きく息を吸つた。

「あー、だめだ。あの家、なんか怖いよなあ。おれ、向こうの角か  
らずつと、もうずつと息、止めてたよ」

健児の言葉に、自分もだよと涉は笑い、その声に重ねるようにし  
て健児も笑つた。朝の陽光が、思いだしたかのように二人に降り注  
ぎ、沈黙の呪縛はすぐに解かれた。

「おれさあ、ロストイメージは好きだけど、それでだれかを殺そ  
なんて、絶対に思わないよ。普通そうだろ？　犯人のあの子もさ、  
どうしてそんなことをしちゃつたんだろうね」

健児がいった。

「わかんない。たぶん、普通じゃなかつたんでしょう？　この前の

「ユースで、精神鑑定にかけられるつていつてたじやん」

「例えば、アストレイのデータを消されたりしたらどうする？　おれなら、かなり落ち込むよ。この一年の苦労が水の泡だもん。でも、殺すまではしないと思うんだよね。渉ならどうする？　やつぱり、殺してやるつて感じで怒る？」

「うーん」

渉は首をひねった。もし、そんなことが本当にあつたら、自分ならどうするだろうか。そうなつてみなければ分からぬのだが、きっと、正氣ではないだろう。アストレイは、自分のかけがえのない一部なのだ。恐らくそれは、自分でもやつ思う以上に、深く自分というものの本質に組み込まれている。

「ちょっと考えられないよ。殺すとかどうかじゃなくてさ、なんていうのか、アストレイがい世世界なんて、ちつとも想像できない。おれ、ロストイメージがなかつたら、今更、一体なにやつてたんだろうつて思うもん」

「そうだね。でも、案外サッカー部とかに入つてたりして」

健児はけらけらと笑つた。

「でもね、そんなの渉らしくないよ。やつぱり渉は、アストレイじやなきや」

渉は窓枠に切り取られた空をぼんやりとみつめていた。雲がゆつくりと流れていった。黒板をチョークが叩くコツコツという音。ノートを走るシャープペンの音。教科書を読み上げる教師の声。なにもかもが単調で、上辺だけを滑り落ちていく。現実は退屈だ。

だがアストレイを操つているときは違つた。高く雲に吸い上げられるような、あるいは大地の淵に落ち込んでいくよつな興奮を感じることができた。昨夜もそうだ。《闇の古代童》<sup>ダークエンシヨントドラゴン</sup>との激闘では、恐怖と殺意が、魂に直接爪をたてた。生々しいまでの生命の感覚が奮い起こされ、野生の本能が刺激された。細胞のすべてを動員した総力戦。存在を賭けた戦い。倒さなければ倒されるという、単純にし

て、それだけになによりも力強い事実。ギリギリで牙を避け、重い剣を打ちつける。視界は赤で染まり、耳鳴りは止まず、汗と鉄と血の臭いが鼻孔びのくを刺した。そうしてついに、アストレイは勝利したのだ。あの恐るべき巨体が音を立てて倒れると同時に、百を超えるギヤラリーたちから一斉に歓声があがつた。鳴りやまぬ声の嵐を忘れることができようか。そのひとつひとつが、心からの叫びであった。もちろん、歓声とはいっても現実に声が聞こえるわけではなく、ディスプレイ上に吹き出しの形でメッセージが表示されるだけだ。だが、画面が激闘たたかを讃たたえるメッセージで覆われてまるで收拾をみせぬさまは、鳴り響く歓声そのものとして、渉の鼓膜こまくを震わせた。

比べれば、現実はあまりにも色あせて見えた。ロストイメージの世界では英雄だつた渉も、ひとたび現実に戻れば、目立たぬ路傍の石ころに過ぎなかつた。とりわけ顔がいいわけでも取り柄があるわけでもない。白く細い体は見るからに弱々しい。気の利いた会話もできず、人前に出ることも嫌いだ。内向的な性格のせいで学校でも友達は少ない。とはいえそれが苦痛というわけでもなく、気の合う数人の仲間とよりそつて、そつと気配を消して一日を過ごしているのが心地よかつた。不満がそうたくさんあるわけではない。ただ、退屈な毎日であつた。

渉は、ふと幼い時分に想いを馳せた。白く霞かすみのかかつた記憶の向こうに思い浮かぶのは、なにも恐れなかつた幼少時代だ。無知と無邪氣さ故に、絶対無敵の感覚が全身が満ちていた。自分ならだいじょうぶ。自分ならできる。意識してはいないまでも、そんな漠然とした自信のようなものがどこか心の奥底にあつて、毎日が希望とか安心とか喜びで満たされていた。テレビのヒーローに憧れたときも、世界の平和を守るカラフルなヒーローたちと自分との差は、変身セットを手に入れることができたかどうかの違いでしかなく、もしも自分がそうした偶然に出会つたならば、いつでもヒーローになれるのだと信じていた。そのために勇気が必要ならいくらでも沸いてくるし、厳しい特訓が必要なら喜んで耐えられるはずだつた。

だが、そんな感覚は、背丈が少しづつ伸びて、遠くまで世界を見渡せるようになると同時に薄らいでいった。世の中には無数の人たちが暮らしていく、ニコニコとなんでも聞き入れてくれる大人たちとは別に、公園の砂場やブランコを争って、全力で戦わなければならぬ相手もいるのだと知った。そんなケンカに負けたのが、最初の挫折だったのかもしれない。初恋の女の子は振り向いてもくれなかつたし、かけっこではいつもビリだつた。テストはマルよりもバツの数が多くて、そのせいで、将来の夢から消えていった職業は多い。将来の夢なんて聞かれても、やりたくないことばかりが多くて、本当にやりたいことなどは分からぬ。ともかく自分は世界の中心にいるわけでなくして、むしろその片隅でひつそりと息をしているのだといふことを、ゆつくりと思い知らされた。「あきらめる」「などと自身を説得する必要すらなく、それは自然と胸に染みた。夢だつて？ そんなものはどかかに消えてしまった。ヒーローになんてなれるはずがなかつたのだ。

渉はため息をつくと、板書用のノートの下に隠していたもう一冊のノートを取りだし、パラパラと頁をめくつた。薄いブルーの罫線の入つた真っ新たな頁を開くと、そこに慣れた手つきで勇者アストレイの姿を描き始める。渉のペンが走るのと同じ速さで生み出されていく精悍な眼差し、厚い胸板、たくましい腕、丸太のような脚。なにもかもが渉にはないものであった。だが、この勇者アストレイこそが、紛れもなく渉の分身なのである。渉は、アストレイの右手に両刃の剣を持たせた。その重みに、上腕の鉄のような筋肉が一層に盛り上がる様子を加える。ロストイマジンの大地を走る風は、アストレイの赤毛をたなびかせるだろうか。渉のペンが風の動き加えた。そうして勇者は、顔を打つ砂塵に、その目をかすかに細めるのかもしない。

渉はノートに覆い被さるようにしていた頭を持ち上げて、遠目にその出来を確認した。悪くない。満足した渉は、アストレイの立つその余白に、小さな物語を書き加えることにした。冒険の舞台は《

エトランカ砂漠》だ。古代の秘宝。危険な罠。恐ろしい呪い。わき起こる物語のイメージは無限であつた。アストレイの日々に、退屈さの忍び寄る隙などあるはずもなかつた。

「ねえ？ サツキの時間も書いてたんでしょう？」

休み時間になると、そそくさと健児がやつてきて、渉のノートをのぞき込んだ。

「ちょっとだけね。新しい冒険を考えたんだ」

渉は、アストレイのイラストと、几帳面な字で書かれたノート一頁分の小説を見せた。

「アストレイが遺跡に眠る秘宝を見つけるんだ。古代の呪いに苦しむ砂漠の『狗頭人』たちを助けることにもなる」

「すげえな、続きは？」

ざつと田を走らせた健児は、感心した表情でいった。

「次の時間に書くよ。待つてて」

渉はいった。

「マジでこんなイベントがあつたらいいね。また舟木さんについてみたら？ てかさ、渉は滅茶苦茶ロストイマジンが好きなんだなあつて思うよ。こうやって、いつもロストイマジンのことばつか考えてるもんな」

健児は渉を、見慣れぬ異国の人間を見るかのように、まじまじと見つめた。

「もともとゲームは好きだつたけど、ロストイマジンは違うんだよね。全然別物。なんていうのかな、昔から想い描いてた世界がそこにあるつて感じなんだ。自分がヒーローになれる世界。すぐに夢中になつたし、気がつけばもう抜け出せないくらいにドップリとハマつてた」

渉は、ついつい口調が熱くなる自分に苦笑した。だが、そんな渉の笑顔は、次の瞬間に凍りつく。

「まあ、ロストイマジンかよ」

突然、渉の肩越しに野太い声が響いた。渉が振り向くよりも早く、ヌルリと突き出された手がノートをひったくつていく。

「あ……」

渉は遠ざかるノートを、ポカンと口を開けて見送った。

「おれが見てやるよ」

鈴木雄太は、当然の権利のようにいった。渉は立ち上がりはしたもので、どうしてよいのか分からず、おどおど手を伸ばしたりひたりした。

雄太は、いわゆる不良に分類される生徒であった。それほど非行が目立つわけではなかつたが、粗暴な性格は気弱な生徒を震えさせるに十分な威圧感があつたし、そうして生徒たちを脅して歩くことを楽しんでいる節もあつた。特に渉や健児などのオタクっぽいグループは格好の獲物である。同じクラスになつて以来、危うきに近寄らずとばかりに雄太の目にとまらぬようにしていたのだが、不幸なことに、渉は目をつけられた。こうして向こうからこられてはどうにもならない。後はただ、一刻もはやく嵐が過ぎ去るのを待つばかりであった。

「あいかわらず、くだらねえもの書いてるんだな、うちの勇者様はよお」

雄太は声を張り上げた。

「ゲームの中でのはなしだよ」

渉は雄太の機嫌を損ねぬよう、弱々しく微笑みながらいった。雄太は意に介さずといつた調子で、悠悠と頁をめくる。そこに、田頃雄太とつるんでいる小杉良一までもがやつてきた。

「なんか面白いものあんの？」

「こいつが、またゲームの世界にいりびたつてるからよ、ちょっと現実世界に引き戻してやつてるワケよ。リハビリ、つてやつ？」

良一の問いかけに雄太は笑つた。

良一は、かつてロストイマジンのプレイヤーであったことがあるらしい。しかも渉にとっては最悪なことに、勇者アストレイのこと

も知っていた。

「まさか、あのアストレイが、お・ま・え、とはねえ。雄太にも見せてやりたかったよ。」この弱虫が、ゲームの中じやずいぶんといきがつてたんだから、マジ笑えるぜ。まあ、あんまり勘違いされちゃあ、たまんねえし、おれらが現実を教えてやんなきや」

良一はいった。

「しかしそお、よく恥ずかしくもなく、こんなもん書けるな、おい。へつ、おまえが勇者つてガラかよつてんだ」

雄太は渉に向き直ると、底意地の悪い笑みを浮かべた。

「そうだね、ガラじゃないよね……」

渉はかすれた笑い声をもらす。助けを求めて健児の姿を求めるが、健児は既にどこかへと消えていた。

「で、なんの用……なの？　お昼のパンなら、買いにいくけど……」「今日はパンはいいんだよ。だいたい、用がなきや、話しかけちゃだめだつていうのか？　冷たいもんだよな。クラスメートだつていうのに、いつも健児としかしゃべつてねえしよ。そうだ、この際だから、みんなにもっと自分をアピールした方がいいんじゃないかなにしろ偉い勇者さまだつていうんだからよ。そこんとこを、みんなに教えてあげなきや。おい良一、こいつのノートを読んでやれよ」雄太がいえば、良一はわかつたと唇を歪ませる。

「あ、だめだつてば……」

渉は浮ついた笑みをひきずつたまま、びくびくとノートに手を伸ばした。だが、雄太に後ろから羽交い締めにされ、強引に引き戻されてしまう。

「ははは、ダメダメ、渉ちゃん」

良一はそういうて、コホンと咳払いをすると、ノートの一文を読み始めた。渉が、想いを込めて綴つた、冒険の物語だ。アストレイの息吹を感じ、アストレイに身を重ねた物語。そのそこかしこで、二人は意地悪な喜悦に身を委ね、身をよじつて笑った。渉はか弱く手足を振つて抵抗するが、太い腕でギリギリと締めつけられて、息

をするのも辛いというありさまだ。その惨めな姿を蔑んでか、どこからか失笑が起きた。

「返してよ……」

腕の隙間から、渉がようやく絞り出したのは、今にも消え入りそうな声だった。痛みもあった。怒りもあった。悔しさもあった。それでも渉はそのすべてを飲み込んで、ひたすらに害意のない笑顔を浮かべた。笑ってやりすごすのが一番だというのが、これまでに嫌というほど学んできたことのひとつだった。今日のこの嫌がらせだって同じだ。案の定、一、三分もすると、二人は早々に飽きてしまつたようだ。雄太が大きく欠伸をして、良一も読み上げるのを止めた。

「案外つまんねえな、これ。もういいよ。ほら」

良一は、無造作にノートを投げ返した。ノートは渉の腹にあたつて、ぱさりと床に落ちる。雄太の腕からもがき出た渉は、あわててノートを拾いあげた。ノートをしつかり抱えて、これで受難の時も終わつたと、そつと安堵の息をもらした。だが、二人の嗜虐心は未だ満たされてはいなかつた。

「ほかに、なんか面白いもんは持つてねえのかよ」

雄太があもむろに渉の鞄を手に取つた。

「なんにもないよ」

あわててそういうふた渉の言葉を、雄太の背中は傲然と無視した。以前、健児に貸そうとして持つてきてくれたゲームソフトを見つけられ、雄太に持つていかれたことがある。それもまだ返してはもらつていなが、いまとなつては過ぎたことであつた。肝心なのは、新たな被害を出さないことである。

良一も当然のように、雄太と並んで渉の鞄をのぞき込んでいた。  
まあ、いいか。

渉はぼんやりと二人の背中を見つめた。幸い今日は、二人の興味をひくようなものはなにも持つてきていない。明日からは、このノートも家に置いてこよう。そうすれば、当分は、一人の悪戯の対象

になることもなく、平和な日々を過ごせるだろう。

だが、渉の目論見は甘かつた。

「なんだ、こりや」

雄太が、鞄の横に吊してあつた《世界のカケラ》を手にとった。  
「なんの飾りだ？ へへへ、オタクのくせに、つまんねえ色氣出し  
やがつて」

途端に、ドクドクと言い知れぬ激情が血管を駆け上った。こめか  
みが脈打ち、頬が痙攣する。それは、他人が勝手に触れていいもの  
ではないのだ。全身が泡立ち、返せ、と唇が動こうとした。

「あれ？ 怖い顔して、なに睨みつけてるの？」

雄太がすごんだ。他人を威圧し、意のままに操ることに慣れた口  
調だ。ただそれだけで、渉は体中の力が抜けていくのを感じた。血  
がひき、唇は閉ざされ、言葉が放たれることはなかつた。怒つても  
無駄なのだ。自分には、このいじめっ子に立ちむかう勇気もなけれ  
ば、やり過ごす力もない。渉は下を向いて唇を噛んだ。雄太はそん  
な渉の様子を満足そうに見おろす。

「なんとかいえよ、おい。これが、そんなに大事か？ なあ？」

雄太が低くうなつた。その声にすら人を殴りつける力があるよう  
だ。渉はふらふらとよろめいた。

「いけないなあ、渉ちゃん。こんなのを学校に持つてきちゃあ」  
良一が猫なで声をだした。その目が、弱者をいたぶる喜びに輝い  
ていた。《世界のカケラ》など、一人にとつてはなんの意味もない  
ガラクタである。それでも二人は、ただ渉に屈辱を与えることがで  
きるとの理由だけで、それを奪つていくだろう。渉には、それがわ  
かっていた。それは決して許してはいけないことだ。《世界のカケ  
ラ》は、自分とアストレイとの絆なのだから。

「それは大事なものなんだ。だから、手を放せ」

はつきりと、そういうてやればいい。簡単なことだ。そうして、  
そうして……それでもって、その後で一体どうしたらいいのだろう  
か。そういうてにらみ返してやれば、ちょっとした意地を見せつけ

ることはできるかもしれない。でも、ただそれだけだ。雄太のあのでかい手の拳骨をもらつて、結局、自分は従うしかない。

「どれどれ」

雄太の指が、『世界のカケラ』を鞆から解こうとしていた。

「もひ、だめだ。

涉は絶望に目を閉じた。その時である。

「先生が来たよーっ」

唐突に、陽気なキンキン声が教室に響いた。振り向けば、自身は配布するプリントを抱え、数学教師の大板を背後に引き連れた健児が、揚々と教室に入ってきたところであつた。

「まだ少し早いですからね。あと一分ありますよ。それまでみんなさん、楽にしてください」

大板は教壇に立つと、呑気にそういった。

ちっ、と雄太が舌をうつた。

「おい、いこうぜ」

雄太は鞆の腕に押しつけると、良一と連れだつて廊下へと出てしまつた。涉は、ほっと息をついた。

下校時間が来ると、再び雄太らに目をつけられないようになると、二人は早々に学校を抜け出していった。

「本当に助かつたよ。もう、あれから休み時間の度に、二人がまた来るんじゃないかなって、生きた心地がしなかつたけど、なんとか無事にすみそりだし、それもこれも、全部健児のおかげだよ」

涉は校門を出てからも時折後ろを振り返り、自分たちを追う者がいないことを確認していた。

「ナイスタイミングだつたろう? 先生をみつけたからさ、なんだかんだいって、無理矢理ひばつていつたんだよ。先生、なんか、ワケがわからないくつて顔してたけどね」

健児が胸を張つた。

そんな健児の小さな体が今日はやけに大きく見える。涉は健児の

手をとつて、もう一度感謝の言葉を口にした。本当に、いくら感謝しても感謝したりない。健児が姿を消したときには、正直恨みもした。なんて友だちがいのないやつなんだろうと、胸のうちで罵りもした。だが、こんなにも素晴らしい友は他にいない。健児は、自分とアストレイの絆を守ってくれたのだ。

「で、『世界のカケラ』はどうしたの？」

健児は、渉の鞄を見つめた。そこには、もつ『世界のカケラ』は吊されていない。

「ここだよ。とりあえず、あいつらの田につかないところへ思つてさ」

渉はシャツの胸元をはだけて見せた。ネックレスのように、『世界のカケラ』を首からさげている。

「へー。いいじゃん。格好いいよ。いつも、やつしてればいいんじゃない？」

「だめだよ。また、あいつらに見つかっても困るし。明日からはもう、家に置いてくる」

「そつか、そのほうがいいね。でもよかつたよ。まさか『世界のカケラ』が狙われるなんて思わなかつたけど、無事だつたしね。本当によかつた」

健児は自分のことのように、しみじみといった。

「渉のアストレイはわあ、なんていうか特別なんだよね。おれにしてみても、もう神さまみたいなもんだからさ、やつぱり大切にしたいわけだよ」

「神さまは大げさだる」

渉は笑つた。

「いや、だつて渉が強すぎたから、あのドラゴンも、一ーンなに強くなるつていうんだろ？」

健児は目を輝かせながら、腕を大きく広げた。

オンラインゲームでは、プレイヤーが飽きることなくゲームを続けられるように、時折、ゲーム世界に新たな要素が追加される。そ

れは、新たな魔法であつたり、新たな武器であつたり、新たな冒険の舞台であつたりする。ロストイマジンもその例に漏れるものではなく、そうした大幅アップデートが間近であるとのアナウンスが、既に運営会社からされていたところであつた。そして、昨夜アストレイが戦つた、あの『闇の古代竜』<sup>ダークエンドジントドラゴン</sup>こそが、次回のアップデートの目玉のひとつだったなのである。

渉の操るアストレイが、ロストイマジンの世界で最も強力なキャラクターであることに異論をはさむ者はいない。加えてそのプレイスタイルは王道をいくもので、この手のゲームにありがちな、ルールの隙をついて小利を得ようとするものでもなく、ましてや違法な改造などということには無縁な、実に模範的なものであつた。アストレイは自然とゲームに関わる人たちの注目を集め、そうして、それら注目に耐えうる、十分な実力を堂々と示してきたのだ。そんなアストレイには、しばしば、運営会社から舟木さんを通じて、新たなアップデートに関するバランス調整への協力依頼が寄せられた。今回の『闇の古代竜』<sup>ダークエンドジントドラゴン</sup>においてもそうである。アップデートによって最強のモンスターとして配置されるはずだったこの闇のドラゴンが、実際にどの程度の強さであるのか、そのお披露目もかねて、ひとつのイベントが企画され、実行された。すなわち、最強のキャラクターと最強のモンスターの一騎打ちである。結果、アストレイは苦戦したものの、単身ドラゴンを討ち破ることに成功した。その戦いの一部始終をつぶさに解析した運営側としては、闇のドラゴンをもう少し強力なモンスターに書き換えることを検討したというのである。他にも、こうして『渉』アストレイがゲーム世界に変更を迫った例は数多い。健児は、そんなひとつひとつを数え上げながら、最後にこう締めくくつた。

「渉とアストレイは、世界を変える勇者なんだよ」

家につくと渉は、真っ直ぐ自分の部屋へ向かつた。鞄をベットの上に放つて、制服のまま机の前に座り、パソコンの電源を入れる。

廊下の向こうから「ただいまくらいいなさい」という母親の声。「ただいま」と渉は声を張り上げる。ロストイマジンのプログラムを起動し、ホストサーバーにアクセスした。「おやつは?」の問いかけには「いらない」と答えた。「ホットケーキなのよ」と母親。画面が暗転し、次の瞬間にはモニターの向こうに中世を思わせる街並みが描かれた。ロストイマジンの世界にある、『グロト』という都市だ。「だから、いってば」渉がそういうと同時に、画面の中央に、いかにも堂々といった構えでアストレイが現れた。胸元をわずかに覆う鎧姿で、いかつい大剣を手にしている。兜の下から赤毛がこぼれ、風にたなびいていた。

『こんちは、アストレイ』

さつそく画面にメッセージが映しだされた。メッセージの主は、タケルという魔術師だ。何度も一緒に冒険したこともある顔見知りの一人であった。

『ドラゴン退治、おつかれでした』

タケルがいった。

『こんちは。見ててくれたんだ。まあ、もう一回やつたら、勝てるかどうか分からぬけどね』

ロストイマジンの世界に入つてわずか数秒の間に、渉は現実の世界でのできごとをすつと忘れていた。雄太たちに舐めさせられた辛酸など、ここではなんの意味もない。その代わりに、勇者アストレイとしての誇りと自信が全身に満ちてくる。

『もし予定がなければ、これから一緒に狩りに行きません?』  
タケルがいった。

『ごめん。待ち合わせがあるから』

渉はキーボードを叩いた。今日のお礼に、ヘラクスの経験値稼ぎを手伝うことになっていたのだ。

『では、またの機会に』

タケルはそういって去つていった。

タケルのプレイヤーは、何歳くらいの人なのだろうか。渉はふと、

そんなことを思った。ロストイマジンのプレイヤーは比較的年齢層が高く、小中学生は少ないらしい。以前、オフ会に参加したときも、大学生や社会人が多数を占めていた。無論、渉は勇者アストレイのプレイヤーということで、そんな大人たちの尊敬と驚嘆の眼差しを独占することになった。それがなんともすぐつたくて、居心地の悪い気もしたのだが、思い返してみれば、なんとも楽しい経験だった。

ベラクスの登場を待ちながら、渉はぼんやりと画面を見つめた。アストレイやタケルのように、戦士の格好をした人間が、何人も画面に映っている。どれも回線の向こうで人が操っている存在だ。出会ったこともない人たちが、こうして架空の世界で袖を振れあわせているのだから、不思議なものだ。対して、画面に映る人型の生物の中でも、犬の頭と白い体毛を持つ『狗頭人』や、直立した黒いトカゲのような『蜥蜴人』には操るプレイヤーがない。ロストイマジンの世界では、この『狗頭人』と『蜥蜴人』の二大勢力が終わることのない争いを続けていたが、渉たち勇者は異世界から召喚されて、その世界での勢力争いに荷担するという設定であった。

そういえば健児は、あのオフ会の帰りには、すっかりと拗ねていた。渉ばかりがチヤホヤされていていたことにヤキモチを焼いていたのだ。それでも、『狗頭人』と『蜥蜴人』のコスプレ用のお面の作り方を習つたとかで、それなりに楽しんでいたようだ。今度作つてみると、なんていつてたけど、あれからどうなつたのだろう。

約束の時間を過ぎても健児は現れなかつた。もしかすると店の手伝いにつかまつたのかも知れない。力チカチとマウスを操り、意味もなく、剣を振つてみたりする。

もしこの世界に雄太がいたなら、自分は負けやしない。この世界でなら自分は、なにひとつ恐れず、なにひとつ失わず、なにひとつ挫けず<sup>くじ</sup>にいることができた。雄太など、アストレイの敵ではない。この剣のひとふりで、退治してやれるのだ。渉は真っ直ぐに画面を見つめていた。渉の瞳がモニターの輝きを映す。そこでなら自分は、

求められ、讃えられ、敬われ、畏れられているのだ。

『アストレイが一番強いというのは本当ですね』

『どうしたらアストレイみたいになれますか?』

『アストレイと冒険したつていつたら、みんな羨ましがりますよ』

『お会いできて光榮です。一生の思い出にします』

『フレンド登録させてもらえますか。またお話ししたいのでだれもがアストレイを賞賛する』

アストレイ。

アストレイ。

アストレイ。

アストレイ。

心地よい響き。

アストレイ。

アストレイ。

アストレイ。

アストレイ。

アストレイ。

アストレイ。

アストレイ。

アストレイ様。

「なんだ?」

渉は思わず口にしていた。確かにアストレイを呼ぶ声が聞こえたのだ。だが、ふと我にかえってみれば、自分がだれの呼びかけに答えたのかが分からない。渉はしばし呆然とした。モニターの中では、アストレイが案山子のよう立っていた。多くのキャラクターがその脇を行き来してはいるが、今は画面に浮かぶメッセージはない。

「だれ?」

渉は振り返り部屋を見回した。もしかすると、健児が来ているのかも知れない。だが、無論その部屋にはだれもいない。

渉は大きく息を吸い、耳を澄ませた。あれは空耳などではなかつた。静寂の中、部屋に響くのは、パソコンの駆動音とスピーカーか

ら流れれる単調なリズムの音楽だけ。

「ゴクリとツバを飲んだ。立ち上がり、壁を背にする。もう一度部屋を見回した。ベットの下の暗がり。本棚と壁の隙間。あるいは閉ざされたクローゼットの中。光の届かぬところはいくらでもあったが、そこに声の主が潜んでいるとは考えられなかつた。

やはり気のせいなのか。

涉は首を振つた。少し疲れてるからだと自分を納得させる。うとうとしかけて、夢でも見たかも知れない。そういえば、ノドが渴いていた。冷たいジュースでも飲んで来よう。そうすれば頭も冴えて、眠気も吹き飛ぶに違いない。涉は廊下に通じるドアを開けた。

「うわあっ！」

涉は叫んでいた。開かれたドアの向こうに見慣れた家の風景はなく、不気味に渦を巻く濃い闇があるばかりであつた。電気が消えているのではない。単に暗いというのとは一線を画した闇がそこにあつた。拡がるは虚無きよむの空間。扉の向こうが、まるでなくなつてしまつているのだ。

まるで『門』<sup>ゲート</sup>のようだ。

驚きと同時に、涉はそんなことを思った。その刹那、闇が雪崩せつばなのように押し寄せてきた。有無をいわぬ勢いで涉の全身を飲み込む。たちまちうちに光は遠のき、息苦しさが喉のどに溢れた。まるで海の底に突き落とされたような感じだ。足場はなく、ひたすらに落ちいく感覚。必死にもがけども、手足に触れるものはない。

そこに、再びあの声が響いた。

「アストレイ……勇者アストレイ様。あなたさまのお力が必要なのです……」

だがその言葉は、涉の残した悲鳴にかき消された。

## 第一話 夢見た異世界

「……スメ・レワーリイ・アストレイ。……アル・コラナ・スメ・レワーリイ・アストレイ。ラ・ロウ・セ・アル・コラナ・スメ・レワーリイ・アストレイ」

耳元で、もうずっと声がしていた。低く、蚊の羽音のように近づいては遠ざかり、かすれでは強くなる声。

「つるさいなあ」

渉のもじもじとした咳きに応えて、やけに熱っぽいじよめきが起きた。空気が震えるのを感じて、渉は氣急げに目を開けた。頭が鐘を打つように痛んだ。

渉はしばらくの間、自分がどこにいるのか、いや、そもそも自分がだれのかすら、わからなくなっていた。ただ、かすかに聞こえていたひとつ名前だけが、やけに鮮烈な印象を残している。聞き間違うわけもない。それは。

「アストレイ……だつて？」

渉は目をこすり、大きく息を吸つた。思いがけず冷たい空気が胸を満たし、全身の感覚が目覚める。暗闇の中、炎の柔らかな明かりが辺りを照らしていた。ぱらぱらと火の粉が飛んでいる。なんどなしに見つめた彼方には、大きな月があつた。満月だ。同時に、背中に固い感触があるのを知つて、自分が仰向けに寝ころんでいるのだと気がついた。冷たい床だつた。ここはどこだろうと思いながら、ぼんやりと空を見つめる。屋根はない。きれいな星空だ。これまでに見たどんな星空よりも濃い星空。星と星が重なりあいながら、見渡す限りの天を埋め尽くしていた。

「アストレイ様」

バチッと薪の爆ぜる音に混じつて、渉を、いや、アストレイを呼ぶ声がした。渉は弾かれるようにして体を起こした。月を見ている場合などではない。焦点の合わない目をこすり、薄闇に目を凝らし

た。

### 「アストレイ様」

間違いない。その声の主は目前の暗がりにいた。月と炎にぼんやりと照らされる三つの人影。だれが自分をアストレイなどと呼ぶのだろうか。くすぐったい心地よさを感じながらも、渉は目を凝らした。そうして、その正体に気がつくと同時に、短い悲鳴が喉<sup>のど</sup>を駆け抜け、にやけた口を割つて出た。

そこにいたのは“人”ではなかつた。首の上に、あるべき人の頭はなく、その代わりに妙に賢そうな犬の頭が据えられているのだ。それはまるで、ロストイマジンに出てくる《狗頭人》そのものであった。

### コスプレ？

最初に思い浮かんだのは、それが健児のいたずらであるということがだつた。だが、違つた。渉はまじまじと異形<sup>いぎょう</sup>の存在を見つめた。ふさふさとした白い毛並みは頭だけでなく、首から下へも切れ目なく繋がり、それらが羽織つたマントの下へと消えていた。かぶり物にしては、やけに出来が良すぎる。だとしたら、これは夢なのだろうか。渉は痺<sup>しび</sup>れたようになつて、ただ呆然と目の前の光景を見つめた。

真ん中の《狗頭人》は、渉とそう変わらぬほどの背丈で、手に杖を持つていた。顎<sup>あご</sup>から垂らす鬚<sup>ひげ</sup>が長いのも、腰<sup>こし</sup>が少し曲がっているのも、歳のせいだろうか。一方で、その少し後ろに並んで立つ二人の《狗頭人》は、どちらも立派な体格をしており、その狼にも似た鋭い顔つきと一分の隙<sup>すき</sup>もない立ち姿は、どこか威圧的ですらあつた。ここはどこなんだ？

渉は、素早く周囲に視線を走らせた。自分を中心に、崩れかけた壁や巨大な石柱が立ち並んでいることに気がつく。もともとは屋根もあつたのだろうか。足下には、いくつもの瓦礫が散乱していた。時折テレビで見る古代の神殿跡のようだ。神殿は円形をしていて、その中心に渉がいた。神殿内には、渉の他に三人の《狗頭人》があ

るだけであったが、よくよく目を凝らせば、神殿の外側にも、少し距離を置いて、点々と小さな炎の揺らめきがあった。神殿は小高い丘の上にあるのだろう。炎の傍かたわらにある動く影を遠くまで見渡せた。とはいえ、それら影が人なのか、あるいは目の前の三人と同じく『狗頭人』であるのかまではわからない。ただ、ざつと数えてみても、三十、いや、四十からの気配がそこにはあった。

なにがおきているのか。目の前の連中はだれなのか。そして、こことはどこなのか。渉は「ゴクリとツバを飲んだ」と、年老いた『狗頭人』が、衣擦れの音とともに一步前に進み出て、深く頭を下げた。かがり火に身にまとうローブが青く映えた。手にした杖の頂部には、フクロウの彫り物が据え置かれている。

「異界の勇者アストレイ様、我らが声に応じてはせ参じていただけましたこと、深く感謝いたします。ここは大地の西部、カラツサの森の星靈石場でござります。この地で今宵、『門』が開くとの預言があり、我ら一同、ここからあなた様をお呼びいたしました。ようこそおいでくださいました、アストレイ様。一族みな、心より歓迎いたします」

意識は次第にはつきりとしてきていたものの、聞き慣れない単語が続いていたせいで、その言葉はほとんど理解できなかつた。だが、どんな説明よりも、どんな思考よりも先に、ここが渉の知るどんな場所とも違うということを、肉体が先に感じとつていた。この世界の空氣に触れた肌が、鼻の粘膜が、三半規管が、さざ波のようにざわめき、この異常な事態に声にならぬ叫びを発していた。

「どうぞお立ちくだされ。差し支えなければ、お手を貸しましょうぞ。異界の勇者よ」

「アル・コラナ・スメ・レワーリイ？」

渉はその言葉を小さく口の中で繰り返した。知らぬ言葉であるにもかかわらず、不思議とその意味が脳に染みた。

「異世界……の、勇者……」

確かめるように漏らした渉の言葉に、杖を持つ人物が大きくうな

ずいた。

ここは異世界。今、自分が立っているのは、いつもとは異なる見知らぬ世界。その意味することの、あまりのばかばかしさを、どう受け止めればいいのだろうか。

「だからいつでしよう」という母親の声が聞こえた。「ゲームなんてやってると、みんな頭が変になるのよ」

涉は自分を引き起こそうと伸ばされた手をみつめた。炎に映えるその手は涉の顔をすっぽりと覆うほどに大きく、指はゴツゴツとしていた。指先にある大きな爪は、ナイフのようなどがつている。犬人間の手は、やはり獣じみていた。

差し出されたその手を、涉は容易にはとどめることができなかつた。未知の生物に触れるという恐怖もあつた。だがそれ以上に、この世界のなにかを受け入れるということは、それがどんな些細なことであつても、我が身の破滅へと即座に繋がりかねないと思えた。

それを見越してか、差し出されたその手は、人慣れしていない犬や猫にそするように、辛抱強く、自分からはそれ以上近づこうとはせず、じつと涉からの接触を待つていた。

異世界。ここは、異世界。

その言葉が脳裏をめぐつた。いつしかそれは、搖るぎない現実として涉の中に根づこうとしている。無理もない。月が、星が、風が、神殿が、爆ぜる炎が、犬人間が、それを支持していたのだ。涉は慌てて目を閉じ、耳を塞ぎ、息を止めた。それでも全身の細胞がふつふつと沸きたち、この異変を声高に叫んでいた。涉は歯を食いしばり、そうしたすべてを必死で吹つ切つた。内に籠もり、自分の中で、この事態のその意味するものをどうにか理解しようとする。涉の思考は、これまでに培つてきた常識と、たつたいま突きつけられる非常識との間を激しく行き来して、ほとんど目を回さんばかりであつた。あり得ぬものはすべて否定してしまったかった。だが、今自分が見知らぬ世界について犬人間と話をしていることは、紛れもない事実なのだ。

本当に、頭がおかしくなっちゃったんだろうか？

混濁した思考は濁りを増す一方であつた。頭蓋の中で、なにかがカラカラと音を立てて空転した。そんななか、幾度となく思い浮かびながらも、その都度捨ててきたひとつ回答が、次第に膨れあがり他を圧倒した。それは摩耗し、熱を失つていたが、それだけに“こなれた”扱いやすさがあつた。肉体と直感がそれを否定していた。だが、疲れ果てた渉は、そこに屈した。

これは夢、なのだ。

渉はゆっくりと目を開けた。犬人間はまだそこにいて、手をさしていた。

いいさ、これは夢だから。すべてが夢ならば、さあ、なるようになねだ。

渉はゆっくりと体をもたげると、その手をとつた。指先にゴワゴワと固い毛の感触があつた。犬人間はわずかに目を細めて、微笑んだかのようであつた。

「御安心くだされ。我らが勇者様よ。姿形は違えども、我らはあなたさまの僕。（アル・コラナ）申し遅れましたが、わたくしは『狗頭人』の都、『アル・バルガリイ』の預言者、ヨムラと申します。左右に控えておりますのが、『バルガニアス』のアタとシーザでござります。あなたさまは我らが希望。あらゆる勇者の中につて、最も強く、最も勇敢な御方と承知しております。さあ、偉大なるアストレイ様。立ち上がり、一族の者に、その御姿をお示しください」

ヨムラと名乗った犬人間は身を引いて、渉の前に道を開けた。途端に月が輝きを増した。渉は神殿の外に目を凝らし、ひれ伏す大勢の人影、いや犬人間たちの白い姿を見た。

「ようこそ。異界の勇者、アストレイ様」

ヨムラが高く杖を掲げたのを合図に、ひれ伏す犬人間たちが一斉に歓迎の言葉を口にした。くぐもつた声が、ビリビリと夜気を震わせる。

犬人間。いや『狗頭人』。彼らはそれをノムルティといった。か

すかな松明の炎と月明かりの下、『狗頭人』たちの視線は一点、渉のみを見つめていた。彼らはひざまずきながら、そつと面をあげて、事の成り行きを見守っているようだ。見ればヨムラもまた、白目のないその大きな黒い瞳で、じっと渉を見つめていた。だが、なにを考えているのか、犬に似たその面からは、どんな感情も読みとることができない。

勇者<sup>アル・コラナ</sup>と『狗頭人』<sup>ノムルティ</sup>たちはいった。その言葉に、この状況に、渉は『ロストイマジン』の導入を思いだしていた。あのゲーム世界では、プレイヤーの扮するキャラクターはすべて異世界の住人という設定であった。こんな風にお迎えがあるわけじゃないが、なにかの拍子にロストイマジンの世界に迷い込んだ人間が、戦士や魔術師としてゲーム世界を冒険をするのだ。状況としては、そつくりとしかいようがない。渉は、胸にさげた『世界のカケラ』の存在を思いだし、学生服の上から触れた。自分もアストレイみたいになれるといふことか？ 知らずと胸が高鳴るのを感じた。だが、それはあまりに突拍子もない出来事であった。いや、これが夢ならば、それも“あり”なのかも知れない。

ともかく、いつまでも呆然と立ちつくしているわけにもいかない。まずはこの、ヨムラと名乗った『狗頭人』<sup>ノムルティ</sup>に自分が置かれている状況を確認してみるのだ。渉はコホンと咳払いをすると、わずかに口を開いた。まさにそのときである。ドッと、大地が揺れた。犬人間たちに明らかな動搖が走り、一瞬の静寂の後に悲鳴が起こった。

「『蜥蜴人』<sup>レフリティ</sup>だ！ 敵襲だ！」

遠く闇から響く声。同時に、金属がこすれあうような“いななき”がして、遠くに点々と明かりが浮かびあがつた。座していた『狗頭人』<sup>ノムルティ</sup>たちが一斉に立ち上がる。

「火を消すのだ！」

ヨムラが杖をふりかざして叫べば、それまで彫像のように直立していた二人、アタとシーザが一足飛びに渉の横を駆け抜けて、その背後のかがり火を蹴り倒し、燃える薪<sup>まき</sup>を散らした。神殿の外側でも、

めいめいが火に土をかぶせ、武器をとり、あるいは走り出していた。テキシュウという、その言葉の凶悪な響きとは裏腹に、渉は妙に意識が冷めていくを感じた。目の前で起きていたことが、本当にゲームのようだと思う。

渉は目の前に広がる光景をぼんやりと見つめた。眼下の犬人間たちはめいめいが剣や槍などの武器を手にし、迎撃の体勢を整えつつある。敵影は確認できないものの、激突は間近であった。一大スペクタクルというには、少々規模の小さな戦闘だが、それでも目に飛び込んでくるパノラマ映像は、十分に豪華なムービーシーンだといえた。CGなどではなく生の戦いということを加味して考えたならば、これはハリウッド映画にも匹敵するかも知れない。

そうして、この戦いの結末に関しては、渉にひとつ予感があった。相手がどれほどの規模の襲撃をしかけてきたのかにもよるのだが、正面からの激突となれば、『狗頭人』が『蜥蜴人』に勝つのは困難であった。ロストイマジンの世界において、この一つの勢力は拮抗しているとはいいうものの、純粹な戦闘能力を比較したならば『蜥蜴人』が『狗頭人』を圧倒していた。一人の『蜥蜴人』を倒すのに、一人の『狗頭人』が必要といわれるほどなのだ。

「こっちが不利なのか」

そう呟いて、渉は唇を噛んだ。だが、悲観するほどのことではないだろう。これぞまさに王道のパターンというものなのだ。物語の最初に、主人公はあわやという窮地きゆうじに立たされるが、無論、そんな導入のイベントで死んだりはしない。結局主人公は助かつて、そこから逆襲の物語が始まるという寸法である。

「アストレイ様を！」

ヨムラの叫びが、渉の妄想をかき消した。同時に、駆けよったシーザが渉の腕をとつた。

「なつ、なに？」

観劇を邪魔されたのも不満だが、それ以上に、強くつかまれた腕が痛んで、渉は非難の声をあげた。

「シーザとアタが身をお守りいたします。一刻も早くこの場を離れてください。アストレイ様には重要な御役目があるのです！」

ヨムラは叫び、きびすを返した。

「者ども、武器を持て！ 応戦するのだ！ 勇者様をお守りしろ！」  
地響きはますますうなりを増し、狂暴な叫び声がそこに混じつて  
いた。今では、闇の中に敵の姿をはつきりと確認することができた。  
その数は三十をくだらないだろうか。

『蜥蜴人』、『狗頭人』達が呼ぶところのレプラティの全身は黒い鱗で覆われている。その鱗が月光に照らされ白く輝いていた。一糸乱れぬ前線が怒濤のごとく押し寄せるなか、揺らめく白い照り返しは、夜の海の波頭を思わせた。対する『狗頭人』たちの反応も素早かつた。四十を超える白い毛並みの集団が雪崩のように大地を滑る。手練れた動きであつた。二つの戦線が距離を詰めた。沸き起ころ雄叫び。怒号。いななき。大地を蹂躪した二つの軍勢は正面から激突した。無骨な金属が指揮棒のように振られ、歓喜と絶望の歌をかな演奏である。

「やつぱり……」

渉は思わず口にしていた。『狗頭人』たちはかなりの訓練された軍勢のようであつた。だが、その戦線は、ゆっくりと、だが確実に崩壊しつつあつた。黒い飛沫が白い絨毯にじわりと広がっていく。渉の腕がぐいと引かれた。

「失礼を御許しください。このシーザが先導いたします。参りましょう」

『狗頭人』の一人が渉を引きずるようにして、走り出した。  
「いくつて、どこへ？」

「森に身を隠すのです。さあ、急ぎましょ」  
シーザと名乗った『狗頭人』は容赦なく渉の腕を引いた。もう一人の『狗頭人』であるアタは、既に神殿を出て、丘をくだる途中であつた。油断なく身構え、二人がやって来るのを待つてゐる。渉も走り出したが、最後にもう一度、未練がましい視線を丘下の戦場へ

と送った。《狗頭人》たちの戦線はゆっくりと後退し、拡散しつつあった。あるいはその動きは、当初から予定されていた戦術なのかも知れない。結末を見られないのが、なんとも残念だ。

「アストレイ様！」

遠くからアタが叫んだのと同時に、空気を裂く音がした。再び前を向いた渉の足下の床に、気がつけば一本の矢が突き刺さっている。石を割り、地を穿つたそれは、獲物を逃した無念さにブルブルと身を震わせていた。

「くつ！ ここも危険です。急ぎましょう」

シーザに急かされるままに渉は走り、神殿から外へと通じる石階段を降りた。

「怯むな！ 勇者様をお守りするのだ！」

いつの間にかヨムラの声が、遠く雄叫びに混じっていた。

アタも駆けよってきて、渉の空いたほうの腕をつかんだ。渉は二人に引きずられるようにして、神殿のある低い丘を駆け降りた。少しスピードを緩めてと懇願するも、二人は非情であった。突然の全力疾走に、渉の膝はがくがくと笑っていた。そもそも渉は靴を履いていない。草露に、靴下を履いただけの足が滑つた。バランスを崩し、体が大きく宙に投げ出されてしまう。転ぶまいと必死で身をよじり、足を突きだした。そして、力強く踏み込んだその先には、鋭い小石が転がっていた。

「痛つ！」

足裏から背筋に走る激痛に、渉は悲鳴をあげた。もはや崩れ落ちる体を支える気力もない。背中を打ちつける衝撃に続いて、視界がぐるぐると回った。丘を転げ落ちているのだ。

「うわっ、うわっ、うわあああ

渉の切れ切れな絶叫がこだました。渉はそのまま丘の裾野までたどりつき、勢いを失つたところで、目を回してうずくまつた。

「止まらずに！ 森へ逃げ込むのです！」

アタが渉を助け起こしながら叫んだ。アタの指差す前方三百メー

トルほどとのころに、月明かりを拒む暗い固まりがあった。深い森だ。そこへ逃げ込もうとしているのか。

「でも、足がつ」

渉は泣きそうな声をあげた。足の裏がジクジクと痛んでいた。血が出ていたに違ひなかつた。なぜ自分が痛い目にあつてはいるのか、それが理解できなかつた。しかも勇者と呼ばれた人間が石ころを踏んで怪我するつてどういうことなのか。これなら、矢傷でもこさえたほうがまだ格好がつぐ。渉は手に触れた草をむしって捨てた。

「だめだ間に合わん！」

焦れながら背後を振り返っていたシーザが短く叫んだ。そのシーザの見つめる先を、アタが見つめ、続いて渉が見つめる。

つい先ほどまで自分たちのいた丘の上で、竜にも似た騎獣のいなきが響いていた。揺れる炎が神殿の中に見え隠れする。

「コッチダ！」

不吉な甲高い声が響き、炎が石柱の間からこぼれ出てきた。騎獣たちの大地を蹴る音がビリビリと伝わってくる。

「見つかっただ！ アストレイ様、お急ぎください！」

アタに再び手を引かれて、渉は不平の声をあげようとした。だが、その犬の横顔は肉食獣の険しさを滲ませていて、渉は慌てて言葉を飲み込んだ。足から伝わる痛みが、夢にしては異様なまでにリアルだつた。変なところばかりがリアルで、面白みのない夢だ。渉は不満を呴きながらも、よろよろと走り出した。一方のシーザは、低いうなり声とともに、その場に立ち止まっていた。

「なにをしてる？ 早く来てください、シーザ！」

異変を感じ、色めき立つアタの言葉にも、シーザは振り向かなかつた。

「ここはわたしが引き受けた。先に行くんだ！」

そう叫ぶとシーザはマントを払い、腰の剣を抜いた。踊る炎が一つ、いや三つ、シーザに迫つている。

「一人では無理です！」

アタはシーザに駆けよるそぶりをみせるが、シーザの声がそれを留めた。

「来るな！ お前は勇者様をお守りしろ！」

シーザは叫ぶと、剣を上段に構えて走り出した。

「安心しろ！ すぐに追いつく！」

シーザの声は凜として揺るぎないものだった。

アタは一瞬のためらいの後で、渉の手をとり走り出した。シーザの行動は無謀だった。一人で何人もの《蜥蜴人》に挑もうなんて、望んで死ににいくようなものだ。渉はぼんやりとそんなことを思つたが、今はそれよりも、身に迫る大事があった。足がもうずっと痛んでいたのだ。どこかで手当をするとして、ばんそうこうかなにかはあるのだろうか。それに、こんなに走り続けたら絶対に脇腹が痛くなる。

せいぜいと息を切らせながら、渉はチラリと背後を振り返った。雄叫びをあげて剣を構えるシーザの姿と、シーザに躍りかかるいくつかの影が見えた。それら複数の影はたちまち絡み合い、大きなひと塊りの影へと変わる。どれがシーザでどれが敵なのかも、もはや見分けはつかない。ただ、時折掲げられる剣ばかりが、不気味に月に濡れていた。

寒かつた。空腹かつた。案の定、脇腹が痛かつた。足はもう丸太のように重たくて、まるでいうことをききそうにない。下草の深い森の中を歩いたせいで、足の裏はもちろん、学生服から露出していた手や鼻の頭に、小さな擦り傷をたくさんこさえてしまった。

森の中は月の明かりさえも届かず、どこまでも深い暗闇であった。アタは闇の中でも多少の日は利くようで、木の根を避け、朽ちて倒れた大木を超えて、森の奥へと入り込んでいった。渉もそれにつき従う。

森の奥までは、もはや戦いの物音も届くことはなく、不気味な静けさが満ちていた。何時間歩いたのだろうか。時間の感覚もわから

なくなつたところで、よつやくアタが立ち止まつた。

「ここにでよろしいでしょ。追つ手の気配もありません。朝までここに潜ひみましょ」

アタの言葉を待つよりも早く、渉はその場に崩れ落ちていた。アタは木の根の隙間に、静かに腰を降ろした。あぐらをかきながらも、しゃんと背を伸ばしているのは、渉への敬意だろうか。一呼吸ついだ渉は、アタに倣ならい適当な木を見つけて、それを背にして座り直した。森の土は湿つていて、尻がむずむずとした。学生服が泥だらけだ。膝のあたりなどは擦れて破れてしまつている。これを母親に見せたら、滅茶苦茶に怒るだろう。

「ところでさ、ここはロストイマジンの世界なんだよね？」

一息ついた渉は、腰を昇つてくる冷氣に小さく震えながらいつた。

「ロ……、ロスト……なんとかとは、なんでしょうか？」

渉の言葉に、アタは困惑の声で応えた。言葉が通じないわけではないのだが、共通の認識までは期待できないようだ。順を追つて、ゆっくりと話しをしなければ、理解してもらえないことも多そうだ。渉はため息をついた。

月の明かりも通さない深い森の中では、アタの姿もからづじてその輪郭が把握できるだけであつた。短く浅く繰り返す呼吸は、まさに犬を思わせるものである。ただ、闇の中でこうして言葉を交わしている分には、人と少しも変わりがない。渉は話しながら、いくつかの情報を整理した。

「まず、君たちは『狗頭人』<sup>ノムルティ</sup>で、敵は『蜥蜴人』<sup>レフラティ</sup>。この二つの勢力は、『大地』<sup>アラワティ</sup>の霸權をかけた戦いを続けている。そなんだね？」

「そのとおりです」

「で、その戦いを助けてくれる勇者が必要だつた、と」

「はい。この戦いを終わらせるには、アストレイ様の御力が必要だとの預言がありました」

その割に、いまここにいるのが、「アストレイ」ではなく「渉」だというのが、いい加減なところであった。大体、自分が本当にア

ストレイなら、あの程度の『蜥蜴人』など、一人で殲滅することもできるのだ。渉はシャツの下から『世界のカケラ』を引き出すと、その不格好な水晶を見つめた。闇の中では少しも輝かないが、それで十分であった。もっとも日の光の下で見つめたとしても、石自体が白く濁っている上、カッティングもされておらず、原石をなにかでたたき割ったような、そんな雑な作りであったから、さほど見栄えのいいものではない。それでも渉は、そこにアストレイを感じた。水晶を強く握りながら「アストレイ」と口の中で呼びかけた。もちろん『世界のカケラ』がそれに応えることはないのだが、そうすることで渉は、アストレイの姿をはっきりと思い浮かべることができた。今日は、その息づかいや、鼓動、体温までもをはっきりと感じじることができる。もしかすると、このロストライマジンの空気がそういうさせるのかも知れない。

アストレイ。世界を変える勇者。強靭な肉体と卓越した剣技と人知を超えた魔力を備えた存在。

「どうせならアストレイの夢を見たかったよ」  
敵をあしらう勇姿を想い、渉はフンと鼻息を荒くした。拍子にクシャミが出た。

「森は冷えます。これをお使いください。少しお休みになるといいでしょう。朝まではまだ時間があります」

アタは立ち上がり、羽織っていたマントを脱ぐと、それを渉の腕へと押しつけた。マントの下には革製の鎧を着込んでおり、腰には剣が提げられていた。

渉はロープにくるまりながら、もうひとつクシャミをした。

「たき火とかできないの？」

その言葉に、アタは静かにかぶりを振った。敵に居場所を知られる危険は犯せないと。いう。

「お腹が空いたんだけど」

「申し訳ございません。雨露をしのげる御寝所も御食事の準備もしてはいたのですが、まさか奴らにこうも早く居場所が知られようど

は。敵に悟られぬよう、わずかな軍勢でお迎えにあがつたのも、あなつてしまえば果たして上策であつたのか。いざれにせよ我らの不覚でした

アタはそういうて、不安げに、歩いてきた森の奥を見つめた。

「なにか見えるの？」

「いえ。ただ、無事に逃げられたうかと思いまして」

渉の脳裏に、剣を構えたシーザのシルエットが浮かんだ。そのシーザに襲いかかるいくつもの影。シーザはきっと負けただろう。複数の『蜥蜴人（レプラティ）』に一人で戦いを挑むなんて、正氣とは思えない。

「みな、無事だといいのですが」

そういつて、アタは深く息を吐くと、二人の間に重苦しい沈黙が漂つた。

まだまだ聞きたいことはあつたが、疲れが渉の舌を重くした。瞼まぶたが自然に下がつてくる。そもそもこれは、思ったよりも陰気で、つまらない夢のようだつた。寒いし、痛いし、それにもうくたくただ。こここらが、潮時かも知れない。

「朝まで動かないなら、少し寝るね」

渉はぶつきらぼうにいうと、体を横たえた。

「どうぞお休みください。わたしが番をしています」

アタの言葉をよそに、渉は目を閉じた。もぞもぞと体を動かし、寝心地の良い姿勢を探す。だが、木の根は固く、地面は冷たい湿気を蓄えていた。それでも、押し迫る眠りを追い払うことはできなかつた。『世界のカケラ』をシャツの中に戻し、意識が薄れていくにまかせた。

つまらない夢なら、もう見なくてもいい。目が覚めたなら、いつものようにオンラインの世界で心ときめく冒険をしよう。そこでなり、紛れもなく、自分は勇者アストレイでいられるのだ。

森の中にうすらと明かりがさし、にわかに小鳥の呼び合つ声が

頭上を行き交つた。渉が目覚めたとき、アタは昨日と同じ格好のまま、じつと渉を見つめていた。

渉は目をこすつた。頭を振つて、眠氣を払う。それでも、やはり今自分が寝てるのは木の根の隙間で、やはりそこにはアタがいた。目は覚めたのに、夢は続いていた。しつこい夢だ。寝て起きて、それも全部夢でしたなんて、なんとも面倒な夢。渉は静かな不安に肝を冷やした。もしこれが、夢じやないとしたら、もしもこれが、本当に起きていることだとしたら。渉は、そこに答えがあるかのように、期待の眼差しをアタに向けた。だがアタは、黒い瞳で、ただ見つめ返すばかりであつた。

『狗頭人』<sup>ノムルティ</sup>を陽光の下で見るのはこれが初めてであつた。硬くピンと張つた白い短毛は全身を覆い、突き出した鼻は黒い。じつとしても、頭頂に並ぶ三角の耳が、時折神経質にピクピクと動いていた。首から下は人間の造りにも似ているが、足の関節のつき方などは、犬を思わせるものだつた。本当に犬人間だ。渉はゴクリとツバを飲んだ。

「そろそろ出かけたほうがよろしいでしょ？」

アタが口を開くと、長い舌が見えた。口の中には、鋭い犬歯が生えそろつてゐる。

「どこへ？」

「まずは昨日の襲撃跡へ戻ろうかと思います。危険はありますが、現在の状況がわかるかも知れません」

アタが立ち上がりつたので、渉もそれに続こうとした。だが、体がひどく強ばつていた。羽織つていたマントが朝露にしつとりと濡れている。渉のぎこちない動きに、幾筋かの水滴が流れ落ちた。アタの全身も濡れていたようで、ブルリと身を震わせて、毛についた水滴を振り落つていた。

二人は、早朝の森を無言で歩き始めた。夜の闇を行くよりはずいぶんと楽な行軍ではあつたが、渉のむき出しの足はさらに痛んだ。見ればアタも靴は履いていないようだ。

「痛くはないの？」

渉はいった。

「足だよ」

きょとんとするアタに、渉は続けていった。その瞬間、渉の足が、落葉の下に埋もれていた朽木くわきの幹を踏み抜いた。昨夜小石で傷つけたのとは逆の足だ。

「いーたーいっ！」

渉の悲鳴に、アタは慌てて駆けよった。そして、渉の血の滲んだ足を見て、鼻と目の間に深いシワを寄せた。

「擦り傷がひどいですね。この薄綿だけで歩くのに慣れていないのですか？ どうして黙っていたのですか？」

「だつて聞いてくれなかつたし、アタも靴を履いてなかつたし……」

アタは、《狗頭人》<sup>ノムルティ</sup>の足の裏には太い毛と厚い肉の塊があつて、靴などいらないのだといった。

「《丘小人》たちには靴を履く習慣があります。わたしたちだって、場合によつては靴を履きます。どんなことでも構いません。御要望があれば、遠慮せずに申し付けください」

そういうながら、アタは周囲を見回した。そして、すらりと伸びる黒い幹の木を見つけると、よかつた、と呟いた。幹の表面は滑らかで、下枝は少なく、梢の付近に網目のように枝が集中する、一風変わつた木である。渉にも、その特徴的な姿には見覚えがあった。

「それは、もしかして、《弓引の木》？」

「はい。靴、とまではいきませんが、当座はこれでしのげるでしょう」

アタは、ナイフで木の皮を剥ぐと、渉の足裏に樹皮をあてがい、マントの端をちぎつた布でしっかりと縛りつけた。

「ありがとう。歩きやすくなつたよ」

渉はその場で足踏みをして、足裏の感触を確認した。弓引の木の樹皮は、まるでゴムのような質感だ。

「勇者様の世界にも、弓引の木があるのですね」

「いや、そういうわけじゃないんだけど、たまたまね」

ロストイマジンの世界にも、その木は登場していた。その幹は丈夫でしなやかな弾力があり、弓や鎧の材料によく用いられていたのだ。

やっぱり、これは夢なのだ。弓引の木はそう信じるに足りる材料のようであった。仮に自分が、本当に異世界にやって来たとして、そこが自分の大好きなロストイマジンと同じ世界だなんてことがあらうか。それは到底あり得ないことに思えた。すなわち、この世界のすべてが、自分の夢の中の出来事でなければつじつまが合わないことにななる。

とはいって、ここがロストイマジンの世界としても、ゲームの世界とはやはり違う点も数多くあった。辺りに生える木ひとつ、花ひとつとっても、渉の世界とは似て非なるものばかりであったが、そうしたすべてがゲームに登場してきたわけでもない。

ふと渉は、自分が吸い込まれた、あの暗闇のことを思いだした。あそこに落ちて、自分はこの世界に来たのだ。だとしたら、あの時点では、既に夢を見ていたということになる。

「健児、約束の時間にこなかつたからなあ」

そう呟いて、渉は唇をとがらせた。

要するに、自分は健児を待っているあいだに、ついつかり、うとうとと寝入ってしまったということなのだ。

もう、すべては夢。

この夢の一部始終を健児に話したら、さつとひびく驚くだらう。健児の反応を思つて、渉は小さく笑みを漏らした。だが、そんな渉の心を、一陣の冷たい風が吹き抜けた。この夢は、本当に覚めるのだろうか。

そのときである。アタは犬歯をむき出して、小さくつなり声をあげた。渉はビクリとして小さく悲鳴をあげた。

「御声をたてぬよう、氣をつけてください。奴らの臭いが風に混じ

つていています。恐らくは昨日のものでしが、用心に越したことはありません

アタは自分から決して離れぬよう涉にいうと右手で腰の剣を抜いた。そして、鼻を高くあげて、周囲の匂いを繰り返し嗅ぐ。

「行きましょう」「う

アタはそういうて歩き始めた。だが、その歩みは鈍い。数歩、歩くたびに鼻をひくつかせ、耳をそばだたせては、慎重に周囲の様子を探つていたからだ。

そうして二人は、むつりと押し黙つたまま、森の中を進んだ。

森を出たのは正午近かつたのかも知れない。太陽は丘の向こう正面に位置しており、その光を背景に黒く崩れかけた建造物が重苦しく浮かびあがっていた。そこが昨夜の神殿であるのは間違いがなさそうだ。神殿のあるならかな丘に続く平原では、そのところどころで煙が上がつていた。そこにあるのは引き倒されたテントや荷車などのがうだ。

アタは無言だった。渉も口を開けとは思わなかつた。用心深く周囲をうかがつてから、一人はそろそろと森を出た。陽光はさんさんと降り注ぎ、緑は鮮やかであった。空は青く、鳥たちか気ままに歌つていた。いかにも牧歌的な光景である。黒煙がなければ、そこが戦場跡であることを疑つたかも知れない。神殿に近づく渉らの気配に、草むらに群がつていた鳥たちが慌てて空に舞つた。そのまま近くの木の枝に止まると、物欲しそうな視線を眼下に送り続けている。

鳥たちは、なにを漁つていたのだろうか。

その疑問に対するあまりにも当然な答えを、渉は思い浮かべることもできなかつた。軽率だつた。些細な好奇心に後押しされて、渉は足を進めた。先を歩いていたアタが、茂みの中をのぞき込み、突然呻いた。なにかがそこにあつた。それが引き返す最後のチャンスであつたかも知れない。だが、渉はそれを見た。そこには、パック

りと腹を割かれた《狗頭人》の死体が横たわっていた。

「シーザ……」

アタの長い口から、低い声が漏れた。

涉は、慌てて視線をそらせた。だが、想像を絶する映像は、深く脳裏に刻み込まれた。口を大きく開けた顔は、虚ろに空を見つめていた。白い体毛が、赤黒く血に汚れていた。

コレハイツタイ、ナンナノダ。

風が吹き、焦げた匂いが鼻孔を刺した。その中に混じる異質な匂い。唐突に、それが血と肉の匂いなのだと知った。涉は言葉にならない叫び声をあげた。その場にうずくまり吐いた。昨夜からなにも食べていないおかげで、吐瀉物は少ない。それでも、繰り返し吐き、胃液は喉を焼き、鼻の粘膜を刺した。

アタが、涉の背に軽く手をおいた。

どれだけそうしていただろうか。顔をあげるのが怖かつた。だが、目をそらせば、それですむというものではなかつた。

「大丈夫ですか？」

アタの心配そうな声にも、涉は答えることができなかつた。

だが、絶え間ない吐き気は、不意に去つた。脳のどこかが、突然に沈黙した。感情が消えてしまつた。涉は立ち上がり、焦点の定まらぬ目で、ぼんやりと周囲を見つめた。そのまま、なにかにとり憑つかれたように歩きだした。

丘のふもとには、全身が黒い鱗で覆われた、蜥蜴の顔をした死体もあつた。そのガラスのような大きな目が、青く空を映していた。

「《蜥蜴人》の亡骸です」

アタがささやくよにしていつたが、その声は涉には届かなかつた。

涉は丘を駆け上つた。そして、神殿の中心部に立つて、昨夜と同じように平野を見おろした。いくつかの死体が点々と大地に横たわっていた。その多くは《狗頭人》のようであつた。うつぶせの背から、折れた槍の穂先が突き出している死体があつた。なにかをつか

もつと手を伸ばしている死体もあつた。折れ、重なり、力なく垂れる命のない塊たち。

違う。

渉の中で叫ぶ声がした。

今ではそれを、認めるほかなかつた。

これは、夢なんかじやない。

アタは、渉を石柱の影に座らせると、生存者がいないか確認をしてくるといつて、忙しく立ち去つていつた。だがそれは長くはかからなかつた。野営地をぐるりとめぐつたところで、肩を落として帰つてきた。

「行きましょ！」

やがて渉の元にやつてきたアタは短くいった。

「行くつて……どこへ？」

「みんながやられたわけではありません。後は捕まつたか、あるいは逃げ落ちたのでしょうか。無事な者がいれば、こんなときのための集合場所が決めてあります。さあ、行きましょ！」

アタが渉の手をとつて引き起こした。

「行きたくない」

渉はその手を振り払つた。

「なんなんだよ、これは！ 夢なんだろ？ 夢だつていうの、アーティの、

どうしてぼくは目が覚めないんだ。どうして、あんなものを見せつけられなくちゃいけないんだ！ こんなところ、もうたくさんだつ！」

！」

渉の言葉にアタは目を丸くした。驚きのためか、頭にのつた小さな耳がピンと立つっていた。

頬をなでる風の冷たさで、渉は自分が泣いているのだと気がついた。死の感触が空氣に踊つていた。視界の端にちらつく、たくさん死が、自分を責めているように思えた。うめき声がそのまま固ま

つたような顔。見開かれたままの目。なにかを求めて突き出された手。怨嗟の声<sup>えんさ</sup>が聞こえる気がして、渉は身を震わせた。自分はこれを、映画のようだと喜んでいたのだ。

座り込んだ渉の目に、一本の矢が飛び込んできた。昨夜、渉の足下に突き刺さった、あの矢だ。それは、固い矢じりを深く、石の床に埋め込んでいた。

渉は唐突に、その矢が自分を射抜くことだってあり得たことに気がついた。鋭い鉄の矢じりが胸をえぐり、肋骨の隙間を抜けて、肺を、あるいは心臓を貫いたかも知れない。そうなれば、自分ももの言わぬ死者たちの仲間入りをしていただろう。その凄惨なイメージは、昨夜にはまるで思い浮かべることのできなかつたものだ。渉は慌てて首を振つた。違う。あの矢は、自分に当たるべきではなかつたのだ。だつてそうだろう？ ぼくに関係のない世界の出来事で、どうしてぼくが死ななきやいけないんだ？

「アストレイ様……」

恐る恐るアタはその名を口にした。

「ちがうつ！ ぼくはアストレイなんかじゃないつ！ ぼくは勇者なんかじゃなくて、ただの子供なんだ！ ケンカもできない弱虫なんだ！」

はじかれたように渉は叫んだ。その剣幕にアタは毛を逆立てた。アタには渉の言葉の意味がまるで理解できないようであつた。もどかしさが激情に火を注ぎ、渉はそれを治めることができなかつた。

「帰してよ！ ぼくを、元の世界に帰してよ……」

渉は声をあげて泣いた。

「では、ワタル様とアストレイ様とは、まったく別の存在というわけではなくて、だけれども、ワタル様とアストレイ様とは違う存在である、ということなんですね」

「そういうこと」

渉はそっけなく答えた。もう、何度も同じことを説明しだらうか。

だが、前を歩くアタのさかんに首をひねつている様子を見るに、充分に理解していなければ明らかであった。

アタと涉は、再び森の中を歩いていた。どこのにも行きたくないとはいっても、それは無理な話だ。涉にしても、今や頼れるのはアタだけであった。アタが行くといふのなら、例えそこがどこのあらわと、ついていくしかないのだ。

さんざん泣いたおかげで、気も多少は楽になっていた。涉を支えるのは、なるようにしかならないところ、ながば開き直りなのだが、それでも足を進める力にはなる。

「だから、そう、演劇……みたいなものだよ。この世界にだって、劇ぐらいあるでしょ？ ぼくは、ロストイメージンという舞台で、アストレイという役を演じてたの。アストレイはたしかに勇者だったけれども、それは物語の中でのことだし、ましてやぼく自身は、勇者なんてガラじやないわけ。どう？ これでわかった？」

「なるほど……、そういうことでしたか。今度は、とても分かりやすい説明でした。その、ロストなんとかとか、ゲームだとか、そういうのはちょっと理解できませんでしたが」

アタはしきりに深くうなずいた。

「わかつてくれて嬉しいよ。要するに、ぼくじやなんのお役にも立てないってわけ」

そういうながら涉は、そのことが少々口惜しくもあった。ロストイメージンとそつくりの世界。アストレイが実在してもおかしくない世界。その世界にあって、みんなから勇者と期待されていて、それでもやはり、自分にはなんの力もないということを認めなければならぬのだ。とはいへ、すべては命あっての物种である。こんな危険な場所にいつまでもいていいというものではない。戦争が本当にあって、死がすぐそばにある世界。この世界は、一介の中学生には荷の重すぎる世界なのだ。

「だからぼくはね、一刻もはやく、元の世界に帰してもらいたいの。わかるでしょ？」

涉はいった。

「その件については、しかと承知しました。預言者ヨムラならば、それも可能でしょう。さあ、そのためにも合流を急ぎましょう。間もなく日が暮れます」

西の空が茜に染まる頃、涉とアタは、山肌にポツカリと空いた洞穴にたどりついていた。その前には、三十人ほどの《狗頭人》たちが、車座に身を寄せ合つて居る。遠田にも、傷つき、疲れ果てているのが見てとれた。

「勇者様だ！」

涉たちに気がついた歩哨が声をあげた。その声に、陰氣に沈んでいた集団がにわかに活氣づいた。ぱらぱらと立ち上がり、我先にと駆けよつてくる。涉とアタは、たちまち、集団の中心に取り込まれた。

「アストレイ様、御無事でなによりでござります。アタ、よくぞ勤めを果たした」

ヨムラは杖を高く空に掲げると、小さく祝詞を口ずさみ、一人の無事を祝福した。

涉はアストレイの響きにピクリと眉を上げたが、渦巻く興奮の中では、とてもそれを否定する気にはなれなかつた。まずは、この場の空氣をどうにかしなければならない。すがるようにしてアタの横顔を盗み見るが、アタは数人の仲間と無事を喜び合つており、涉の困惑にまで気が回らないようであつた。

「昨夜の野営地を見てきました。十四名の遺体を確認いたしましたやがて、真剣な視線を向けるヨムラを前に、アタが神妙にいつた。

「シーザはどうした？」

「兄は、残念ですが……」

アタは答えた。

「シーザが……。惜しい男を亡くした」

ヨムラの大きな耳が、目を覆わんばかりに、力なく垂れた。同時

に、人垣の向こうに立つ巨躯の戦士が戦斧を胸に抱き厳かに天を仰ぐ姿が、渉の目に映った。

「シーザは我らを逃すために、単身敵に立ちはだかりました。シーザの手にこれが握られておりました」

アタは黄金の鎧飾りを取り出すと、高く衆田の中にかざした。二匹の竜が交差する図柄が打ち出されている。

「敵将、ギリオトリアの紋章です」

アタの言葉にざわめきがおきた。方々で起きる囁きや、その反応を見るに、ギリオトリアとは『蜥蜴人』<sup>レクライテ</sup>の戦士の中でも名の知られた存在のようであった。だが、そんなことよりも渉は、アタとシーザが兄弟であることに驚いていた。そんなそぶりを、アタはまるで見せていなかつた。それはきっと、自分への気遣いからなのだ。

「シーザは尊敬できる戦士だ。いかにギリオトリアであろうと、一対一の戦いでシーザが後れをとることなどはなかつた。相手は三人だつた。不利な戦いに、シーザはすんでその身を投じたのだ。勇敢な戦士だつた」

先ほどの、戦斧を持つ巨漢の戦士が声高にそういった。

「ありがとうございます、『ヒストルニイ』のアガルマ」アタはいつた。「ですがシーザだけではありません。多くの同胞の命が失われました。その死は大きな痛手ですが、勇ましき戦士たちの魂には神の恩寵があります。彼らは英靈となり、神の側に使える勇敢な戦士となるでしょう」

方々から、アタの言葉に賛同する声があがつた。巨躯の戦士アガルマは肩を震わせていた。泣いているのかも知れない。

「遺品をいくつか持つてまいりました。都に戻つたならば、遺族に渡してください」

アタは腰につけていた小袋をヨムラへと差し出した。

それを確認するヨムラの口から、亡くなつた者の名が、一人、また一人と連ねられていつた。その言葉に、無念の声を漏らし、苦しげに顔を振る姿をそこかしこに見ることができた。

死の悲しみは、決してアタだけの問題ではなかつた。あの地で散つたいくつもの命。その命のひとつひとつに、母親がいて、幼子がいて、友人がいた。彼らは、仲間を失つたのだ。

涉は、死者を悼む《一狗頭人》たちの姿に胸の痛みを覚えた。だがそれと同時に、自分がとてつもなく質の悪い冗談の犠牲者のように思えた。見知らぬ集団の葬式の中に呼び出されて、さあ悲しめといわれても、それは無理な話なのだ。結局のところ、この異世界がどこにある、ひとつ現実なのとしても、やはり自分のあるべき現実ではないという思いが胸にわだかまつた。

涉は、アタの手を引いた。

「あのこと、みんなに説明してほしいんだけど」

涉のその言葉に、アタは深くうなずいた。居すまいを正し、コホンと咳払いをする。

「預言者ヨムラよ、勇者アストレイ様について、お伝えすることがござります」

アタのその言葉は、これまでのどんな言葉よりも、一座に強い緊張をもたらせたようであった。多くの目が涉を盗み見て、あるは言葉を続けるアタへと熱く注がれた。

そわそわと身を揺する涉を横目に、アタは驚くほど正確に、涉の置かれている立場を伝えた。アタが最後に、なにかつけ足することはござりますかと涉に向き直つたときも、涉はただ首を横に振るだけでよかつた。いや。もしなにかをつけ足したいと思っても、その場は既に、なにかをいいだせるような雰囲気ではなかつた。

ある者は叫び、ある者は卒倒し、ある者は呻いた。ざわめきは収まらず、怒りとも絶望とも悲しみともわかる混濁したなにかが、一座の中に生まれ、その場を押しつぶさんとしていた。やがて、じつと口を開いたヨムラが、杖を掲げて頭の上で数度、ゆっくりと振つた。その仕草ひとつで、方々に飛び交つていた声が、ピタリと治まった。

「ワタル様というのが、あなたさまの眞実の名でしたか。我らの不

作法をお許しくだされ。しかしながらこのヨムラ、ここに至つては、我らの探し求めた勇者様とは、まさにワタル様のことであったと確信いたしております」

「初めから説明しなければならないでしょう。王都でわたしの授かつた預言には、選ばれし異界の勇者を北の『聖域』の中心地、『神々の座』にまで無事お届けしたとき、悪しき神は滅び、この長き戦乱は、我らの勝利に終わるとありました。ワタル様を無事『神々の座』まで御案内することが我らの役目になります」

「いや、だから、ぼくは人違いなんですよ」

なにをどう誤解したならば、そんな発言につながるのだろうか。渉は混乱する頭を必死に回転させて、どうにかそれだけを口にした。

「いいえ。我々は『水鏡』を通して、幾多の魔物をうち倒す勇者様の影をしかと拝見したのです。火を吹く竜も、雷呼ぶ邪靈も、勇者様の敵ではございませんでした。まさに鬼神のことをその強さを、わたしはしかと、この田で確認したのです。とはいって、水面に映る幽かな影を見たのみといえばそれまで。それがアストレイ様であつたのか、ワタル様であつたのか、あるいは過去の姿か未来の姿かもしかとわかりませぬ。しかしながら、アタの言葉によれば、アストレイ様はワタル様の演じる存在であり、ワタル様の御指示で動かれる傀儡<sup>かいらい</sup>のこと。ならばワタル様こそが、眞の勇者ということではござりませぬか。いいや、アストレイ様のことは別にしても構いません。『水鏡』<sup>アル・サウス</sup>がアストレイ様を映しだしたのも、すべてはワタル様を呼び出すためであつたと考えることもできるのです。神の御意志がそこにあつたのですから、間違いなど起つるはずもないのです」

予想のできなかつた展開に、渉は開けた口を閉じることができなかつた。

ヨムラはさらに説明を続けた。彼らの住む、大地<sup>アラナワティ</sup>には、時折異世界から『來訪者』がやってくる。それら來訪者は、毛も鱗もない、いわば渉のような人間であるらしい。そして來訪者の中には、この

世界の常識を覆すような力を持つ者も多く存在しており、これまでも世界に大きな変革をもたらしてきたのだ。したがって、来訪者にはすべからく、勇者たる資格があるのだという。

「ますます口ストイマジンだよ、それじゃ……。ひどいパクリだ」

涉のやけくそな咳きもヨムラには届かなかつた。

「我ら《狗頭人》<sup>／ムルテイ</sup>は、《蜥蜴人》<sup>／ケラテイ</sup>との戦いにおいて、かつてないほどの劣勢に迫いやられております。それもひとえに、《蜥蜴人》に組みする来訪者、忌まわしき《黒騎士》が現れたためです。《黒騎士》は恐るべき戦士です。わずかひと月あまりのうちに、数え切れないのでの同胞を殺し、いくつもの町を焼きました。蜥蜴どもが勇者と讃える《黒騎士》に対抗することができるのも、この戦いを終わらせることができるもの、ワタル様を除いて他におりませぬ。どうか我らに力を貸してはくださいませぬか」

ヨムラの言葉の最後の一音が消えた後には、立ちのぼる静かなる熱意が、涉の答えを待つて、その場に渦巻いていた。

「む……無理ですよ。だから、ぼくは、勇者なんかじゃないんですつてば」

ヨムラの口がうなるように歪み、その拍子に鋭い犬歯がこぼれ見えた。涉の喉など簡単に裂いてしまった。だが、それに怯むわけにはいかなかつた。

「ぼくは戦士でも勇者でもありません。悪いけど協力はできません。それがお互いのためなんです。だから、その、他の人にあたつともらえますか……」

涉の言葉に、狗面の一団はそれとわかるほどに落胆した。だが、ヨムラが手にした杖の尻で地面を叩くと、再びピリピリとした静けさが辺りを支配した。

「『めんなさい……。でも、ぼくにはできないんだ。勇者なんかじゃない。魔法が使えるわけじゃないし、剣だって持つたこともない。ケンカだって弱い、本当に弱いんだ。だから、鏡だなんだかはわからないけれど、ぼくがここに呼ばれるなんて、こんなのなんかの

間違いなんだ。だつてそうだろう？ 見たらわかるじゃないか。ぼくは学生服を着て、まだ子供で、腕も細くて、とても戦えるようには見えないだろ？」

繰り返される渉の言葉は、十分とはいえないまでも、やがてわずかな理解を得た。再びざわめきがおき、今度はヨムラもそれを制止しなかつた。渉は下を向いていた。表情に乏しい犬人間たちではあったが、それでいながらも、その居並ぶ顔のひとつひとつに浮かんだ明らかな失望の色は、渉をも憂鬱<sup>ゆううつ</sup>にさせるものであった。

「たしかにアストレイは、ぼくの操るキャラクターなんだけど、それはゲームのことなんだ。現実じゃなくて、空想の、夢の中の存在なんだよ。アストレイなんてどこにも存在していないし、それに……ぼくじゃアストレイにはなれない」

そういうて、渉は唇を噛んだ。

「来訪者を見た目で判断するような者はここにはおりません。幼子のように見えて、恐るべき力を持つ者もいるからです。しかもワタル様は預言<sup>アル・マクン</sup>によって現れた御方です。この世界の歴史をどこまでひもとことうとも、そのようにして呼びされた来訪者はおりません。まさしくワタル様こそ、勇者となるべき御方といえるのです。とはいえ、もとよりこれは、我らが世界のこと。ワタル様には露ほども関係のないことになります。ワタル様の御立場もしかとわかりました。無理強いをできることでもございません。ただ、お許しください。わたしの力では、ワタル様を元の世界にお戻しすることはできません。ワタル様をお呼びした昨夜と同じように、神の預言<sup>アル・マクン</sup>を待ち、恐らくはかかるべき魔具を授かつた後、星々の配置が適した夜に送喚の儀式を行う必要があるでしょう。そのためには、まず我らが都へと向かうのがよろしいでしょう。ここは前線に近く危険な場所です。ギリオトリアの軍勢に狙われているとあってはなおのこと。その点、都ならば備えは万全です。身を清め、神殿にて次なる預言<sup>アル・マクン</sup>を待ちましょう。どうか御心配なさらぬよ。これより我ら、ワタル様を無事にお帰しするために、全力を尽くします。」

ヨムラは力強く宣言した。

そこは白と黒の世界であった。床も壁も天井も、白と黒のタイルが交互に並ぶ巨大なチェッカーボードを思わせる造りであり、書棚や脇机や椅子など、生活の匂いを感じさせないわずかな調度品も白と黒の一対で揃えられていた。

「貴様も『來訪者』を呼ぶ力を得ていたとはな。ふむ、どこまでもバランスが保たれるではないか」

部屋の主の一人である、黒いローブの魔術師が嘲笑の笑みを浮かべながらいった。見つめる先には、水晶の止まり木に落ち着く一羽のオウムがいた。見つめられてオウムは、その部屋では不自然に鮮やかな翼を羽ばたいて、居すまいを正した。

「もちろんです。バランスこそが、このゲームの要です」

オウムは橙色のクチバシを天に掲げて、甲高い声を張り上げる。黒の魔術師の正面には、オウムの止まり木と同じく、水晶であつらえられた巨大なテーブルがあった。とはいえそれは、食事をしたり本を読むためのものではない。テーブルの表面は、あるところは大きく盛り上がり、あるところは窪み、さながら大地の様相を呈していた。そこには、山があり谷があり、川と海と平野があつて、森があつた。世界を模して作られた、巨大な箱庭であったのだ。そしてその上には、点々と精巧なミニチュアが置かれていた。その多くは白色の『狗頭人』<sup>ハムルティ</sup>に黒色の『蜥蜴人』<sup>レヲラティ</sup>である。同じミニチュアはひとつとしてない。どれもが、仕草や衣装を違えていた。

いま、黒き魔術師の視線の先には、深い森と洞穴があつた。そこにいたびれた『狗頭人』<sup>ハムルティ</sup>のミニチュアが三十体ほど固められていた。さらには、箱庭全体を見渡しても一際異彩を放つ、毛も鱗もない人形、水晶から削り出された人型のミニチュアが、その中央に配置されていた。武器も鎧も身にまとわず、粗末なマントを体に巻き付けていた。

「さてさて、お互いの手駒が揃い、いよいよこれで面白くなつた。

とはいって、両軍に来訪者が加わるのは、かつてない事態だよ。ふむ、これは先が読めないねえ」

黒魔術師は顔をあげ、《ゲームボード》の向こうにいる、白いローブの魔術師を見つめた。白き魔術師はその視線を無視し、たくわえた頸<sup>あごひげ</sup>髏<sup>あごひげ</sup>を手でさかんにしじきながら、静かに盤面を見つめていた。やがてゆっくりと目をあげる。

「減らず口をたたいとる暇があるなら、せいぜい次の手を考えるがいい。すぐにお前の番じゃ」

白魔術師は、唇の端をもじもじと動かしていった。

黒魔術師は肩をすくめると、椅子に深く腰掛け直し、サイドテーブルに用意してあつたグラスを手に取つて、ゆっくりと口元に運んだ。

「もちろん、そうさせてもらひた。だが、胸の高まりが抑えられるのだ。忘れていた高揚感が蘇つてくる。久方ぶりに血が沸くではないか。今や感じるぞ、永き友よ。我々の別れのときは迫っている。ゲームの終わりが近いのだ」

黒の魔術師は琥珀色の液体<sup>フランティ</sup>に含むと、ゲームボードの上に立つ、武装した二十人からなる《蜥蜴人》<sup>レ</sup>の軍団に視線を集中した。昨夜、渉たちを襲つた一団は、その瞳に確固たる意志と殺意を秘めて、深き森の奥へと入り込んでいく。

黒魔術師は満足げに微笑んだ。さらに、北方の切り立つた岩山の山頂で、雲に隠れて翼を休める巨大な竜へと視線を向けた。火山の吹き出す炎の中から生まれた凶悪な巨竜は、その背に不気味な黒い仮面で顔を隠した《黒騎士》の人形を背負つている。巨竜はやがて、雲を蹴散らしながら飛び上がり、ぐるぐると岩山を旋回し始めた。そうして、目標を定めると、力強い羽ばたきとともに、矢のように空を裂いた。その目指す先が、白い水晶の勇者であることは間違いかなかつた。

「おやおや、わたしの手駒が《守護獣》を目覚めさせたようだね。

勤勉なのは結構なことだ。今のところ、我が軍勢はよく働いてくれているよ。貴様の動き次第だが、このままだと来訪者、いや、勇者同士の激突もすぐに見られそうだな」

その瞬間、オウムの足下で、止まり木に添えられていた振り子が揺れて、力チリと音をたてた。

「白の魔術師に告げます。時間です。魔力を注いでください」

オウムは陽気な声でいった。

「タイムリミットがきたようだよ。さあ、早くしてくれたまえ」  
黒き魔術師は、余裕の表情で顎あごをしゃくると、白き魔術師の手番うながを促した。その所作に、白き魔術師は鼻を鳴らした。

「胸が高まるのは、わしも同じよ。だま騙し合いばかりのゲームにも少々飽きがきたところじや。だが決戦には、時期が早すぎるようじやな。北へ向かえば、おのずと両者は相まみえるじやろりつて。なにも焦あせることはない」

白き魔術師は小さく呪文を唱えた。すると、森の周囲に散らばっていた雨雲がゆっくりと動いて、森の上へと群がつていった。湖や川からも水蒸氣が立ちのぼり、次々と小さな雨雲ムルテイを生み出しては、雲の覆いを巨大に育てあげていく。洞窟で休む《狗頭人》達の姿が静かに覆い隠されていった。

「このペテン師め……」

黒き魔術師は静かに笑つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7348e/>

---

ゲーマーズ 二人の勇者

2010年10月28日07時32分発行